和訓栞

多之部 十四

和書門 類
三六七二三 號
一二三 函
二 架
六四 冊

内閣文庫
和書 類
三六七二三 號
六四 冊
二六三 函
二 架

内閣文庫
番號	和 36723	
冊數	64（15）	
函號	263	7

国立公文書館
National Archives of Japan

倭訓栞前編十四

多の部

洞津　谷川士清　纂

た

○手をたとよむハ通音也○田ハ音の轉じしといへり訓なるべし釈名ニ壹耕ニ曰田とみゆ平らの義なるべし禾ニ山田門田津田沢田池田湊田濱田寺田荒田荒小田小山田刈田なとよめり○史記ニ勸学田要劇田發閑田乗田易田剩田一身田荒癈田あり乗田も剩田ニ同じといふ令義解ニ公田者乗田也とみゆ○田令ニ位田職分田賜田口分田なとみゆ別勅賜人田者名賜田とあり○咫をたとよむハあたの略也古事記ニ訓尺云阿多とみえたり尺ハ咫の誤なるべし○誰がを略してたがともいへり古事記の歌ニたまともみえたり誰ニ也何ともいふなるべし○當黨宕伐たの假名ニ用ゆ又囊伐だの假名とし又なニ用ゆ

△たあ

△たいま　日本紀倭名抄ニ當麻と書り又日本紀古事記ニたぎまとも見ゆ万

萬葉集に山城相樂郡の布當をふといしよむも同し○たいまつハ復仲紀の本にみえたり

たいし　倭名抄に柁をよめり古事記に當藝斯形となへたる是也といへり船尾にありて船を正すを木の柄の曲れる形状指り日本紀にかぢとよめり抄に今案舟人呼挾抄為舵師是となへ漢語抄に柁船尾也とも見えたり○五節に大師局あり雲図抄に見えたり又小師あり

だいこく　大己貴の音也佛と肩へ嵐状使ふかすハ舊事紀にみえ軍神なるハ神功紀にみえたり伊勢に大黒谷あり類聚本源に大国玉也といへり○大黒天神ハ儀軌を考るに頭に帽子を蒙り左手に嚢状なり右手に槌印をなせりよし見えたり摩竭持槌飯餾持袋といへハ此二鬼を合せたる也荷葉に載しむ○河内國古市郡大黒(オグロ)村に自然石の大黒状生を大柴其長五六寸許也煤けたるが如く黒し大黒寺あり古刹也式の大祁(ケ)於賀美神社も此村にあり○万葉集に大黒者蒼鷹之名也とも見えたり○大黒天のあハ南海寄帰傳佛祖通載等にくはし新譯仁王經に祀塚間摩訶羅大黒天神青龍疏に大黒天神闘戰神也といへり○三面大黒鼠袋大黒ハ聖宝蔵神經に宝藏神身黄色二臂月三面云云右手持海甘子左手持鼠囊とみえたり○大元帥師祈摩訶迦羅天勝軍ハ佛祖通載にみえたり

たいかふ　攝関の父なる人の称也太閤としるは落髪したまへハ禅閤と称す○謙信ハ五箇國に手をのへ信玄ハ八箇國に手状のべし信長公ハ十九箇國豊太閤ハ天下一統して力にまれり

だいもつ　中古以來大材を大物といふ事東鑑太平記なとにみえたり今も雑産なとのうたに大おひくといふ是也訓てそれたものといふ也○東鑑に載柱一本之車駕牛百二十頭令牽之東大寺建立の料也と見えたり又大白山千佛閣記に日本國千光法師栄西百圍之木凡若干状致して事濟とも見えたり○大物の城ハ攝津にあり河邊郡大物浦也

たいしゆ　太守ハ親王に称する所也天長中に始以上總常陸上野三國為親王任國改守曰太守としも三代格にみえたり

だいみやう　大名小名の号ハ鎌倉時代よりおこる其本ハ名田によれり東鑑を

考へて知ぬへし名義集に利帝利王種也秦言田主劫初人食地味轉食
自然粳米後人情漸偽各有封殖遂立有徳處平分田此王者之始也と
見えたるに似たり儀礼の疏にいふ名跡之名も亦姓氏を指ていへり○頼
朝公前に地頭を置し後武家國郡を専らにしく古代のさかく跡なく
くなりしかど當時の如くにはあらず尊氏公天下の權をとりし後はまた乱
れて大軍をもて他領を攻取て自由乃ふるまひ多く大名所々に出来て中比
の風を変しぬ今の如きは西土の諸侯を封建せしと等しく成しより是
を神代に復せし勢なりけり當時は萬石以上の称なり○人となる称とするに
大名といふは史記の大名之下難以久居の大名なるへし俗諺の長居は懼あり
といふも是也○暦本にいふ大明日也吉上の日也○礼器に大明生於東とみえ
たるは注に日也といへり○だいみやうだけは大明竹とも書り筱竹譜にも業
平竹ともいふ幹は雄竹にて葉は雌竹也大名たけしいふなりといへり
△たう　草乃たうのきりなどいふ薹の音轉也又塔の九輪なとゝいふ似たるをいふ
まやまとにはたふとも出へし○鳥乃名に呼は新撰字鏡にも鳩の音なるへし

今いふと同也著聞集に羽を矢にはぐ事見えたり古今に
山きるみをそみゝ夕日かくやきてうゑ田にうかふたうのこゑきく
○飲食にいふは湯の音なるへし大諸礼にたうの方肉桂陳皮山椒白朮胡椒とみ
えたり○口語にたう借ふるしいふは黨也丹黨は丹治比真人也中村安陪勅使河
原小嶋青木等の類多し私黨(キサイ)は私部也開化帝の流私市川原久下等多し
此外東黨西黨は紀清也此氏流く七黨といふ横山黨は又猪俣黨ともいふ
小野朝臣也荻野岡部海老名野内等多し児玉黨は本藤原也中比より平
氏を称せし者多し本庄倉賀野若児玉等の族類多し○物をまく
たうしといふは桃竹也
たうめ　倭名抄にたうめはとうめの古語也今老女を呼くたうめとをと
めといひ神代紀に姥をとめとよむ其義なるへし日本紀に専字をとよむ又
たうめとも云土佐日記にも翁人ひとりたうめひとりしるゝより或は
専女とも書り○狐をも称を伊賀たうめ源氏物語にも抄に狐をいふ
なりとみえ伊勢乃書に専女三狐神とみえ山槐記に治承二年於齋宮御在

所近邊射教白專女北面下臈源競所從所爲とみえ百練抄に延久四年藤原仲季勘罪名配流土佐國於齋宮辺依射教白專女也とみえたり又宇治拾遺に狐乃いひし詞にたうめやねたるをしふくいせんとみえたれは狐をとらふ詞なるにや

だうち　大鏡徒然草なとにみえたるも攤打の事倭名抄にぜにうちといへり杜詩に白晝攤錢高浪中箋注に攤錢蜀人賭錢之名とみえたり

たうやく　紫式部日記に膏藥をかく暦にて公事根元にも正月三日より御さうやくはなるといへり千瘡膏也といへり独参湯をろくおん湯といふなるへく忌さる詞にや○當藥とよふ事も右の義によるなりや千ふりともいふ酸模の一名當藥とも別也

だうぶく　衣纓家の褻服にいへり道服とよへり其製直綴とおなしく近しも道家の服也野服の制に似たる事鶴林玉露にみえたり水戸義公の新製せられし所の道服は深衣を隱括せる者也○元正紀に禁剪髪鬂鬢輒着道服貌似桑門情挾奸盗之輩といへるは僧衣を指る成へし○壒嚢抄に馬上に着て常せに塵埃を防ぐ者なりとも道服と名くといへるは道路の服なるへし今羽織と称するものゝ此制なるへしよりて今も木綿羽織を道服といへり

だうしき　胡曹抄に當色は位色といふ事也衣服令義解にも見え又當色乃如木もいへりといへり

たうかはり　日本紀に似字を訓せり○給字もよめり催馬樂にさしぐしもなりけりといふ意也源氏に父のおほなるやりといふも三宮の年給といふ年爵をいへり

たうしやう　堂上とかけり搢紳家の称となれり明律にも両京堂上文職とみえたり又正官を堂上官といふ也装束略抄に昇殿をゆるされしを堂上としゆるされぬを地下とす堂上はのほりてよみ地下は滑りてよむを習とせるなりとしもされど古へは殿上に供奉する官を堂上とし庭上にて事を行ふ官を地下といふにもいへる堂上と堂下にて貴賤を分るは非なりとそ

たえる　絶をよめり万葉集に不絶をたえずしとよりたえてたえまなると皆古の假字なりし○殊をたえてともよむも同し又古今集にまてといふはいふもかしこしてふ事を六帖にまてかしこしともよめるにて知

○したふりの絶てしなくハの歌ハ絶て桜のといふ歌をふまへて読出られ
しものといへり
△たをり　万葉集に高山の峯乃手折とよめりたをりに同しまたハ通せる
新撰字鏡に嶼を山のたをたをりともたをりともあり文峠をとらく
をたをりもさをりともありたハ太の誤にや又さしたと通せり○万葉集
ようちたをるたむの山とつくりり古へおをたまむるをも折るといふ梶引折
てぬとよめる是也といへりたハ例の発語とするも通す
たをやめ　神代紀に婦人又女をよめり皇代紀に手弱女人と書せり益荒
男によむをかへたる称謂也たやハてよわの消也よて日本後紀の中及万葉集に
たをやめともよめりまたをと通ふる例あり
△たか　鷹といふたけき也鷙猛を称を或ハたくしのるれハ名く西土乃
鷹揚のことも云へり蝦夷にしてかちかふといふ○倭名抄に黄鷹ワカタカ
一歳の名也大なる者を大たかと称をしらふの白鷹と称を三歳の名也
といへり大たかハ朝鮮より来るとて天武紀に東國貢白鷹とみえたり　万葉に

矢形尾のま白の鷹をやどにすゑかきなでてみつつ飼くしもよしもと
○源氏に蔵人所の鷹といふハ鷹飼ハ蔵人所の被官也御鷹ハ足革御免革
を用ひ装束以下常に異れり諸人對する時に從あり○古事記に鶺を
よめり廣雅にいふ鵰鶚也倭名をのせといふ○鷂ハ雄より大なるをも
て大の音をとりて諸鳥に異なり或ハ弟鷹の音轉雄をせうといふ兄鷹の音
也といへり古樂府に鷂則鷹弟鷹則鷂兄とみえたり○信濃國諏方大明神
御贄鷹といふ事東鑑にみえたり○古ハ雉及小鳥のみを取しむ雁鶴にお
よぶハ近世の事也といへり其ハ靍を捕者を靍の鳥と称して此を愛す○
月令に二月鷹化為鳩とみえたるをハ鶻鶡也といへり○天竺に鷲鴒といひ
契丹に摩鴰といひ高麗に儀雄といふといへり○一條帝の時一の鷹雛
を得たり逸物といへく鳥を鷙を識を信濃の士人豊平なる者視て[illegible]
雙の雄姿を歎して曰此鷹ハ父鵙鳩ミサゴにして母ハ鷹也よてまづ魚を得て
後鳥を捕るべしハ鷹本性を得んと竟に希代の鷹なりしと古今著聞
集にみえたり今も鵰鳩の子ありといへるひちの郷に田圃を作り受たるを

ふそひちの検校豊平といふ事也とあるも高遠の辺に兆持といふ村あ
り其地なるべし伊奈郡也○上古の名鷹天智天皇の磐手乃野守延喜御門
の白兄鷹一條帝の鳩屋袙鶚後一條帝の藤花韓纏藤沢山家等也月輪の鷹
といふハ愛宕山腹大鷲峯の月輪寺にて飼せし也今下野國宇津宮より出
る者必逸物也といへり○鷹ハ死すれど穂をつまずといふ諺ハ李白が詩に鳳凰
不啄粟所食唯琅玕といへるに同じ○蝦夷より出す鷹の羽によろしきをけう
まひやうなり○鷹ハ羽を惜ミ士ハ名を惜むといふハ説苑に君子愛口虎豹愛爪
といへるに同じ○鷹嶋ハ肥前松浦郡に属す明人五龍山と名くる是也といへり
弘安四年元の賊船大風に値て此処に漂流し其兵悉く溺死せり○鷹巣所
の名にもきこゆ○名に犨ハよめり犨國あり尊ハよむ尊氏ありたかくら山
武尊山とかけり○田産によるはなどいふハ高の字也

たから　珍寶をいふ田力の義なるべし公民をおほみたからと訓も詩ふも稼穡
惟寶とみへたり○生兒ハたからとよふハ河内和泉にみへたり今も北伊勢
の俗に遺れり○寶寺ハ乙訓郡山崎にあり今宝積寺といふ

たかし　高字ハよめり神代紀に崇もよめり○貴買にたかくやすしといふハ
漢書に貴賤をよめり種々営みハふしおそしといふ○名に孝ハた
かしよむハ孔安國が孝経序に孝者人之高行といふによれる也とい
へり○たかしの濱ハ和泉大鳥郡也霊異記に高脚濱に作り脚をつよしと
よめり持統紀に高脚海とみえたり○たかしの山ハ三河遠江の境にあり高師里
ハ伊賀にあり

たかみ　神代紀に頭をよめるハ柄頭をいふ古事記に手上とみえたり今つ
かといへり○口語に高処をもいへり

たかひ　神代紀に劍柄をよめり日向風土記にも高日村ハ劍柄村なりし
ハ後人かくあらためたる也手上の訛せるなるべし万葉集に燒太刀手頴とみ
えたるも一本に頴を穎に作れり○万葉集高市皇子挽歌に我大
君ハ高日志らしぬとよめるハ人死して天に登るをいへる詞也

たがふ　神代紀に成字又差字ハよめり違も同じ互と義通せり錯も
よめり音さく也挙錯の時ハ措と同じ○人を訪て不在なるハもいふ

ねよりえう

たかさご　高砂とあり素性高砂の尾上乃さくらしとよみ匡房の高砂乃尾上の櫻咲にけり古今集に高砂の尾上の鹿とよみしは山の惣名也砂長ね山といへるに據れる也といへり○高砂は催馬樂律歌の名にもいへり八雲御抄に六條左大臣うせ給ひて後相方朝臣ありまの湯へ下り給ひけるに高砂の程にて高砂とるんにふと船人にひ侍りければ昔おもひ出て

高砂とたかくなうひて昔せし尾上乃しらべまいて恋しき

和琴の事おもひ出くよく侍るにやといへも○播磨に一所の名とありしは後世乃ゑ也後拾遺集に

我のみとおもひしかとも高砂の尾上の松もまたたてりけると

その名松は太さ五尋ありて雌雄の二幹茂れるよし高砂社記に見えたり忠見の歌は今はひさすら老の友なしとかりさざる也拾遺集に貫之

かくつゝに世にふるおとこる砂の松も我をやなしとみるらん

古今集の序に高砂住江の松も相おひのやうに覚え　とらふは老松の名なるを

地名成とて對句成ふせり明神は延喜の時に大己貴命成祭り後圓融院の時素盞嗚尊奇稲田姫をうりて相殿とす天禄二年也といへり○蛮國の名にたかさごといふは東寧也其國都は寛文元年に国姓爺かよりし台湾也といへり思明洲ともいふ階人の流求に来る時到高華嶼といふを台湾成指ていふといへり明史に万暦四十四年日本有取雞籠山之謀其地名臺湾密邇福建とみえ少国姓爺母は本土松浦商人女也故有勇有義而被擒而不汚身遂潔死以是至錦舎奏舎而不失東寧請援於本朝而許されけり

たかだく　倭名砂に高機とみえ　らり日本紀に高繒をよめり今らふは天工開物の花機也錦綾と織乃機をいへり○姓に髙畑ありり

たかつき　江次才に高杯万葉集に高坏とみえ　うりまさすけよつちたかつきとらふとみえ　うり○伊勢物語に海松成高坏に盛て槲成覆て其槲に昼てとみえ　うり○姓に髙槻あり

たがへす　新撰字鏡に稲をよみふんに耕をよめり有に田成かへすととられり田とらんくを也詩話に一歳日菑始反草也とらも

たがひに　神代紀に互字をよめり手換の義なるべし俗に相身たがひといふ詞
はわり迭も同じ霊異記に遞もよめり更迭也と注す更代交錯をよむべし
迭通して軼に作る更也互也と注す交錯は俚語のたがひちがひ也

たかしる　万葉集に宮柱太敷奉高知為とよめり古事記にもひろき多迦斯理
理とみえたり高敷といふに同じ祝詞に瓶上高知ともみえたり知は敷也
敷は盤なるべしいふ千木高知とも千木高敷とも太知坐とも太敷坐ともいへ
ふかれし

たかだま　万葉集に神祭の事に竹玉を繁に貫垂とよめり竹の輪を玉串
のごとく垂るなるべしといへり神代紀にも五百箇野薦八十玉籤とよめり

たかひかる　古事紀万葉集に日の枕詞にいへり高照とあるをもてたかてらすと
よむは誤也といへり○万葉集に高光日御朝廷ともよめり

たかつかみ　中臣祓に高津神の災とあるは雷神也といへり瑞穂抄には日蝕月蝕
彗星客星霹靂等の災といへり履仲紀に有如風声呼於大虚云々のよる舒明
紀に大星従東流西有音似雷の事も附なるべし

たかつどり　中臣祓に高津鳥の災とあるは天狗也といへり遷却崇神祝詞に天若彦
を高津鳥の殃に依てしなせたまひし名無雉をいふにや一説に仲哀天皇の崩
給ひし神の詔に随ひ給はざりしのみならず民の罪より起れりとして其罪を求
め出して大祓をせさせらるも天武紀にも怪異によりて大祓の有しあとを
以てしかるべしといへり

たかみくら　日本紀に尊位又壇字をよめり高御座の義也内裏式元正朝賀に
設御座於大極殿敷高座以錦とみえ今其体相とるせしは延喜内蔵寮
式内匠寮式等にくはし始は御即位の時のみならず昼夜ともに紫宸殿乃中
央にかざりせられけり昼も御休息に入御なりし事もありとぞ紙にいへ
えらり其形状は鳳輦と同様の物也大殿祭祝詞に天津高御座とみえ日
本紀に登天子之位をたかみくら志らんとよめり○三代実録に天日嗣高座
乃業は掛畏近江大津宮尓御宇世之天皇乃初賜比定賜倍留法奈利とされは
中古の法也○高御倉山は近江也

たかくとの　後日本紀に伊勢大神宮正殿一宇財殿二宇とあり今乃東西乃宝殿

是なり

たかばかり　辨色立成に尺は竹量也とみえたり裁縫尺にて今いふ物さし也○ね
を量るの古法は身の長或は手指をもつて量る是を長量といふといへり八咫鏡
八握剱八尋殿などの類也今も矢に十二束三ぶせなどいへり民間の茅屋に縄
をもちゐて架を定むる法あり西土も亦同し同身寸の法なり○鷹の巣をか
くるに一尺二寸上に枝をのこし其枝に居て餌をたしなむるけれは毋鷹に噬るゝ也
よりて一尺二寸を鷹秤ともいふともいへり定家卿鷹訣に

　男山鳩やかひなるたかはかりかけおくれてや落るなるらん

たかせぶね　倭名抄に艜をよめり三代実録に高瀬舟とみえたり平群郡龍田川に
もある瀬舟なりたかせは高背の義舟の形をいふ也といへり金葉集に
河霧の立こめくれは高瀬川なかくさすのこそすは
蕭則陽が詩に无数過船看不見人聲却在櫓声中とみえたり○高瀬神社及高
瀬川高瀬淀は河内國茨田郡にあり信濃國安曇郡大町の西にある瀬川あり

たかくるま　日本紀に雲車をよめり軍中物見車也

たかまのはら　神代紀に高天原とみゆ高天をいふ也原とは廣く平らかなる
をいふ詞にして禁中をもいへり○常陸國海上に今高天原高天浦の地
名あり

たかみくら　日本紀に天位又寶位を訓せり

たかむなさか　古事記に高胸坂とみえたり高は其處上にあり坂は骨ぐみの坂
ゐなくなる也神代紀に胸上をたかむなさかとよめるは胸前の義なる
へし

たかうなかたな　竿刀とみえりたかむなかされともみえたり元服の理髪に用る
物也神代紀の竹刀(タカヒニ)よりいでたる事なるへし

△たき　瀧をよめり古へはきを濁りよみしや万葉集に瀧字を出したり疾の
義又急也ともいふ義あり奔湍也と注を湍をたきともせともよめり疾瀬
也と注を激流の川などをよめる是也されは瀑布をもいふ也李白が望廬山瀑
布詩にも飛瀧直下三千尺とみえたり○助語によめるはあまさくなるをいふさ
さるおとらふは痛(イタキ)乃ちの義つよくいたるをいふ辞也といへり上を清けていふは痛(イト)かりし痛

うれしきといふといへり日本紀に慨哉をうれたきかなとよめり源氏にうれたく
もいひやるかたなくみえたりよくらふ語也○篁泉をいふは白川のたきつせの
さくみれ成べし瀧とみるなりたき乃糸なとよめる是也○瀧の宮は西行
の哥あり伊勢瀧原宮をいへり又吉野にあり瀧の都ともよめり万葉集に
さも瀧野の城は伊勢飯高郡河俣(カバタ)谷の内なり元暦元年和泉守平信兼住せ
しを義經の兵に攻亡されぬ又丹波國にあり○瀧の音は歌拾遺集に大覚寺に
人々あまたまかりけるにふるき瀧をよみ侍りける上に音とらひ下に関白
とありけるを千載集には此歌を入て瀧の音とあり拾遺集に瀧の糸と侍る
はあやまりし

たぎる　涌をたぎるかしたる詞なるべし全漸兵制に滚を譯せり今も滚湯な
どよみふも是也よて万葉集に落沸と書ておちたぎつとよめりつゝくるし通
ぎて又たぎり流るゝもよめりちとて通をたぎりの謂也たきつ瀧のさ
もゆれはたぎり速川などつ白川などの川門なども同しきや○人の
性質よりふも湯よりおこる詞なるし

たぎし　古事記に今吾足不得歩成當藝斯(タギシ)形となれりといへり日本紀に手研に作
る茶研藥研の類なるべし倭名抄に碾をきさるとよめり一説に舵をたいし
とよめりきしといひ横音通を以て義也といへりさらばたいしはたぎしの約せ
る也○美濃國多藝郡の名も是より出たるよし古事記にみえ又古事記
に出雲國之多藝志の小濱とみゆるは出雲の地名也

たきぐち　瀧口と書り御行水の所に瀧をまうけたり其口に勤番せる武士
をいふなりとぞ蔵人の下に侍るもの也よて瀧口武者なともいへり馬副の瀧
口もみえたり○所の名は鎌倉にあり

たきぶさ　日本紀に髪字頭髻字項髪字などを訓せり髪を綰摠ぬるの義也
略してたぶさといふも是也たきはたぐる也くり反をさ也

△たく　栲とよめるは神代紀に栲幡栲縄栲衾万葉集に栲衣栲領巾(ヒレ)栲角
なとみえたり字書に栲は似楮色白しといへり東國の俗たくといふ木これ成べし
といへり安いかにその木にて此皮を剥取て用ることなれはたくなのをとなへ
し○口語に多く附ていふ詞也希ふともあり日本紀に慨哉をうれ

いふなるなと訓し古今集にちるぞめでたきたきこそ尚多
かくんとも也○髪をあぐるをいふなくとあり万葉集に若草を髪及
にたぐらんともたけばぬれたがねば長き妹が髪ともよめりぐれ及げたら
及ぐ也馬にみる伐馬たぐとらひ舟にのる伐船たぐとといへるも亦通ふ
ぐ是及ぎ也皆たぐり引くるの義也○詰の後にいふは痛の字又をあて
よくうれうくえよく引くの義異國に愁殺笑殺などの殺の語を添ていふ
ふし○焼をたくといふは名義集に陀呵此云焼といへりれは梵語也といへ
りたく火たく香などもいへり日本紀に然をよめり古事記に焼挙焼凝の語
えたり

たぐり　神代紀に吐をよめり吐逆ともいへりたぐりよするを也豫州にて咳て痰
伐吐をたぐるといふとぞ播磨に咳をたぐる関西にせきぐる○相撲の手にも
いへり

たぐひ　彙属迷醜類比匹儔等をよみ神代紀に耦をよみ新撰字鏡に儕と
よめり佛足石の哥にたぐひもよめり又ひ也○古今集の序にも古衣通

姫の流也といへるも童蒙抄に流の字たぐひとよむべしとみゆ

たぐさ　田草ハ万葉集にみゆたぐさ取とも川ともよめり今田の草をとるを田舎に
田草舞といふあり○手草とあるハ古語拾遺にみゆる古事記に手草結天香山之
小竹葉と見り神楽篠の哥にも篠の葉の伐手ぐさにとりてとえてあるも篠の葉を手
草に取てといふ義なるべし楚辞に傳芭兮代舞注に芭與葩同巫所持香草也といへる
に似たり

たくらぶ　比又駮をよめり新撰字鏡に倫をよめり手競の義なるべし技も同し扮もよ
めり

たぐふ　日本紀万葉集に副字をよめり古今集に花の香を風のたよりにたぐへてと
よめるも是也へるをいふ也たぐひと同し新撰万葉集に交へてそとも見ゆ混和の義と
いへり

たくぶり　日本紀に手抉とありて手壺小壺の義なるべし也今も土より塩出し或は陶器の
内ハ指にて捏するものあり

たくそく　神代紀に栲幡千々姫命また梼手幡ハ栲なるべし万葉集に伐をよめる

あら機のよは真櫛りて纔上栲嶋とあり
たくぬとは　日本紀に栲衾新羅國とつゞけり新羅は白と音かよへば屬くる也播磨
風土記には白衾ともあり万葉集にも見えたへを白栲ともよめれば栲布の衾
は殊に白きものなる故なりて也豊後風土記に此木の皮を木綿とするよしみ
えたれば栲衾も実は紙衾なるへし古事記の歌にたくぶすまさやぐかした
さやぐあるをきけや俗諺に四六衾は夜の物といへるも四六は紙の数すて近世
までも庶人は嫁娶にも汁を用ゐしといへりさやぐはさはやぐと通さやくと
は噪也
たくはぬの　古事記万葉集に白きをつけよめり栲つ布といふ也今蝦夷人の
きるといふ厚衣也あて組なる布也信濃にもあり夫木集に寄布恋源仲正
いかなれは恋にむすたく布の穂さゆみなる人のこゝろぞ
一説に栲細之也
△たけ　長をいふは高きの義也年のたけなる徳のたけなるなと皆同意なり〇丈
をよむも長きの意也〇竹は一旬みして長なるものの意也といへり八月を伐乃時

とれ群芳譜に竹小春といへり〇雄竹はかり竹といふ常の竹也雌竹はまたと
いふ後まて皮はけ落〇業平竹は雄竹にて節は雌竹のことしよて名く〇
箱根竹は細長し品川竹は川竹のかし薩摩竹は雌竹の品兼好竹は竹の係
りしく葉をのびやかなる物也〇三股竹は武蔵足立郡芝村にあり実竹あるは
ふしも文節一つつく段々まつくはみけるあり〇美濃高須の南から返ひ
といふ所の八幡の社内に豊竹あり圍四五寸をあり寒竹の大なるかし八月
筍とせすと當广のまんまらほはほえる軸一節一丈餘あり今洛東の禅林
寺にありとは南廣の篔簹竹なるへし〇ゑふ竹は淡竹吉竹は苦竹土用竹
は鳳尾竹鳳凰竹ともいふ筍故生ずる三伏にあり南京竹は義竹なる
竹は椶竹金竹は對青竹嶋竹は黄金間碧玉竹淡竹と呼は秋蘆竹或擂竹
斑竹　簁竹の称は和漢同し漢竹可為觱篥者は豊後より出黒竹は薩摩
にあり和漢の称同し蕩竹如蘆葦といふ者也和漢同し布袋竹は佛面
竹観音竹　和漢同し四方竹は方竹也乳児竹は山白竹根篠は千里竹か志
ろ竹は皮白の義篁竹也翁竹あり葉に白あり雪竹と類也夜叉竹あり北地に

出一節ごとに四方に枝さし出る竹ハ吉野竹林院にあり孟宗竹ハ近年渡来す対
生竹ハ美濃にあり一節に両方に枝さしならぶ竹ハ天親竹也紫竹と竿なとに忌
ハ湘浦の故事によりてならんと蛙蟇抄にみへたり○正月門松に添る竹ハ忌竹の義なる
べし安南國にも正月家々に葉つきの竹を門に立し漂流記に見えたり○豊
後詞に竹の末(ウラ)をうらといへり○蝦夷にハ竹なし矢竹のミ生ず信濃
にも竹生ぜず近年植りといふ○日本紀倭名抄に菌をよむハ気味の猛烈
なるをいふ也新撰字鏡に英をみゝたけとよめりみゝハ耳の義也今佐渡に園
をみゝといへり木菌土菌石菌の別ありといふ也たけりハ菌檝の義古今集の
辞書によるも欲によるも例なしといへり夫木集に松にけりとよめり○
西土にハいそたけを石耳まつたけを松耳と云ると此方にてハ茸字
を用ゆれど後世字書にもみゆ鹿茸などの義によりてハ茸とも書つべし
といへり○丸を毒なる木に生ずる耳ハ皆食べし○齋宮式忌詞に宍(シヽ)
を菌と云せるかくさびらとよめるハ謬也儀式帳に多気とみへたり○
神代紀に峯をよめり高き義にて万葉集に高きを多気ともかけり

たをよぐりてよみならへるいつの比よりの事なるとしらずや伊勢神宮の邊に
朝熊がたけを略して常にたけと称し謡の唱へ契沖も元亨釈書を引
て嶽と竹と同じやうにまうし事をいへり○日本紀の歌にたけそかう
せよといへるハ卒(アク)の義也といへり又たくの下にみえたり○顕照説に田舎人の
云にわとしれとらふにハたけとぢとと見えたり○童の腹病にしけといふ
ハ生字をよめり○式伊勢多気郡竹神社をも下部兼永本に竹田に作る
ハ非也齋宮式に竹上社とあるも上ハ田の誤なるべし今竹川村の産神と寺

たけし　神代紀に悍をよめり猛字壯字健字も同じたけくしともいへり
○信州小縣(チヒサガタ)郡に武石(タケシ)村あり此所より武石を出す四方の小石自然銅乃実
種なり又子檀嶺(コマユミ)神社式にみゆ貞観二年に駒弓神とみへたるも是也○千葉常胤
の子胤盛を武石三郎と称す

たける　日本紀に梟師を訓せり八十梟師熊襲梟師の類也又猛をよみ古事記にハ建字
を訓せり武健の義なり○新撰字鏡に誇をよめり今の俗語にも然云あり

たけび　神代紀に踊語をおみたけびとよみ万葉集に牙喫建怒(キカミタケビ)又をたけび祝詞

式に荒び健びと出せり怒声を出して武くさけぶ義なるべし○たけび塚ハ
伊勢鈴鹿郡長世郷にあり日本武尊の陵といひ傳ふる説ありて建部の訛
なるべしといへりされど高宮村にある丸山より塚と称するもあり日本紀に所
謂能褒野陵なるべし其陵の西に皇子田と称する所あり北にあたりて御
所垣内といふもあり○和名抄伊勢國安濃郡に建部ノ名あり神鳳抄に安
西郡建部ノ御厨とみえたり

たけなハ　闌字をよめりたけハ長也日のたけてるといへり万葉集に最
もたけなハにつくとよめるに闌と書りなりてなれと通ぜり猶の義也廣韻に
晩也とみえたり日本紀に人闌とかきてよなふけぬとよめり廣韻に希也と
みえたり酒闌なりといふも飲酒半罷也といへり古事記に酣とよめるも同じ
○篶ハ竹縄也今火縄に用る物これなり

たけのその　竹園の義竹のそのふといへるハ生の義也親王を申せるなり
梁孝王の竹園乃故事也新千載集に
新しき竹のそのふハ世々の風たえぬる枝に吹かはるへん

たけひのくに　中臣祓にいへる高日國の義也日高見國といふに同じ都とさし
ていふ也

たけのみやこ　神宮雑例集に多気都といへる伊勢國多気郡斎宮の侍る所と
云ふなり堤中納言の文よりかへて俊成卿の文に竹の宮といへるも一説に代々
の天子御即位乃時大嘗會に天子の御竹笠竹にあはせてつくり勅使持
来し内宮の心の御柱に崇めまつるより竹の都といふともいふ俗説にし
て據なし

△たご　田子とかけるなりけるたごのもすそで名ふとよめり源氏物語の手に
袖ぬるゝこひぢとかつしらなからおりたつ田子のみづからぞうき
桂海虞志に民戸強壮可教勧者謂之田子田丁などいへる○潮桶尿桶戒も
ハ田舎の義也擔桶也江戸にいへるひとつといふ伊勢に尿桶をさごといひ水桶乃
名ハ一つに成よるひとつといふ○田子の浦ハ駿河也續日本紀に盧原郡多胡浦獲黄
金献之といへり
早苗とるたこの浦人此ほとりやしおを汲ね袖ぬるゝらん

是ハ駿河の田籠の浦の歌なるを誤く越中なるとこのさこの浦ハ氷海也又丹後の浦をもいへり又越中布勢の海なともよめり上野の國の郡名にハ多胡といへり多胡郡本郷村に古碑石あり碑身半ハ樟樹にかくる高さ二尺四寸厚さ一尺八寸五分上に覆ひ石あり中なる平なるのやし三尺四方にて厚さ六寸あり郡を建し時に立所なり

たごし　倭名抄に腰輿を訓せりたゝハ手の義也海人藻芥に手輿腰輿とみへたり○日本紀に手逓傳と云てたごしにしてとよめり手越の義也○手越河原ハ駿河國なり義助公綱ら尊氏と戦ひし所也

△たさ　日本紀に田狭臣と見えたり

△たし　出雲國造神賀詞に倭文の大御心もたしにと見え雄略天皇の御歌にもたしにはあらしと宣へりたしかなる義也出雲風土記嶋根郡手染郷のたしに丁寧造國在詔而故丁寧負給といへり○助語にめてたしうれしく見えし打なしなといふをつよくいふ辭漏しの義なり

たしか　日本紀に切字又二字をよめり新撰字鏡に切々の字もよみ又綢繆もよめり常に慥字をよむハ類聚國史に上下不慥欲と見え善相公意見にも各慥其意と見えたり中庸の注に慥ハ篤實貌といへるによるなり又著實を譯せり略して著ともいふも手然るの義にや

たしなむ　神代紀に辛苦又困厄欽明紀に劬勞神武紀に厄字なとをよめり切なり嘗の義也嶮岨艱難備嘗といふなるへしたしなめらるゝハ彼方よりいふ詞なり窘字なとをよめり○素盞嗚尊の聖敬日にのかれせ給ふも辛苦をまて表的とせさまたる故也安富佚樂の中に養はせるゝ人ハ味すく辛苦艱嶮を嘗し人ハ味ある故之謂也沃土之民不材瘠土之民嚮義といひ宴安酖毒不可思と誠なる哉

たじろく　源氏うつほに見えたり常をいへり立退の義なるへしてよろぼふ也辟易の字をよむへし通鑑集覧に辟易驚却貌と見えたり俊頼の哥に
ぬるたまのしま板田乃橋わたれハ板こそ絶てたしろくなりけり

たじふね　出衣の義にいふしぶねともいへり直衣始なとに用ふといひ又女の車なといへり新古今集に車よりぬのしたねを出しかたりけりといふ

△たを　足字をよめり他よりらふハさしすせうまでハてらし足之也といふ
我よりふハらうまるをうりてハてしけり○足恭の時ハ音すり○美濃の山
中ニ縄以編て木葉かくふ用ゐる物をといつりため贊の義なるへし
たをや　式文ニ襷をよめり手次の義古事記ニ見へたり日本紀ニ手繦と出せり中
山傳信録ニ手巾以譯せり穀の文ニ三重襷見へたり又龍膽襷とあり○祝詞
ニ手繦桂ル伴男といへるハ膳夫等以いふ也業とする人ハ襷かくるなり○万葉集ニ
みくりこのみれたをやくしよみ源氏物語ニ姫君のたをやめひけむ清少納言ふ
ぬれぐくたをやくあけくるとあるハおりそといふ也新撰字鏡ニ繈をすれと訓せる
も也襁も同し論語ニ襁負其子而至矣と見えたり
たをく　扶助輔佐の字をよめりもと手次の義なるへしたをうるたすくるハ自他の
詞の差也ともふくニ見えり贊をよむハ佐也と注せり霊異記翼も訓り又耿介を
よめり挿たをくの時ハ衛と同し音ひつ
△たせ
△たそ　誰字をよめりたまその畧也侍中群要ニ名謁事其詞云たそ

たそかれ　黄昏をいふ誰彼と見分かたく疑しき時以いふ也源氏ニ見えたり後撰集
ニ
君まぶふとりれてふきハ義の玉たりうれ時もさくとぞいへりける
白氏文集ニ紫藤花下漸黄昏の句ニよれり○万葉集ニたそかれ時ハ夕顔なりと
見えたり
△たゞ　唯惟亶獨除第但秪啻翅特止徒直徑只など以よめり大綸ニ多他泰言如と見え
たり唯ハ専辞と注を獨ハ唯也啻の注ニ見ゆ第ハ但也但ハ單辞と注を又師古注ニ徒也
空也ともみゆ後世語録の文及俗語ニハ皆但を用ゐ啻と翅とハ同し特も但也と注
を徒も同し直も猶但也と注をと只ハ専辞と注せり俗語の只今ハ即今の義也又
漢書ニ亶を用ゐる事多し皆但と注す第通作弟或作地丙吉傳の注ニ師古云地
亦但也語聲之急耳と見えたり戦國策の注ニ適啻同といへり又春秋ニ唯を
用ゐ呂経ニ惟を用ゐ詩経ニ維を用ゐ梵書ニ唯但字不借餘縁と見えたり又
除是除非とよむハ宋乃俗語也俚語の是非といふもの是也又手ニまでたゞハ徒ニ似
よる詞也ただ人ならぬ人をもなふと同したゞその先とよめる事異本に見ゆその先

といつ人の名に忠をたゞとよみ直をなをとよむも俚俗によりていへり○攝津河邊郡
多田院村に五社の祠あり相傳滿仲頼光頼信頼義義家をまつると滿仲攝津守
なりしより多田源氏の称あり源孝道は滿仲の季子文才あり巫陽有月猿三叫衡
嶺无雲雁一行せ以て絶唱とす○たゞ有明の月ぞ残れるの歌は千載集に曉聞
郭公といへる心を読侍りけるとて後拾遺集に

　有明の月だにあれや時鳥只一声の行方をもみし

金葉集に

　郭公あかくてぬるあまによりおもふさ宮になきあはれなる

是等の歌の心いつくしかりけるを此歌は殊の外にきこえて郭公といへり古人も郭
公の歌の才一つをいふにつきはやかに称せり○實定公は文治五年左大臣建久二年出家
称後徳大寺○名に小一條左大臣師尹公あり幹をよむは寧幹の義也齊をよむも東
鑑に田口齊名改紀姓と見えたり

たゞし　正とよめり○名に忠格齊公なと誌によめる是也○俗に但をたゞしといふ
よむ徒也のをもてたゞしは女色わりたゞしは擲字と相似たり

たゞよ　徒をよめりたゞよむは也又直もよめり又万葉集に黙然を讀
て伊勢物語にいへるそたゞならぬつまとみえたり神代紀に不直黙帰とみえたり
たり但もたゞふしよむつまあり又たゞちの略なるあり伊勢物語の是をたゞ
に奉しへそてるなしけり乃義也

たゞす　紀によめり今正乃義也雄略紀の命にたゞすとなれるもの○今の氏姓
に河合社にある八下賀茂のたゞすの森を神名式の鴨川合坐小社宅神社といふ
なりけるも式に鴨川合坐小社宅神社ともいふ高野川とよりて賀茂川に合ふに
て川合といへり小社は三代實録に小祖に作る年中行事秘抄に御祖多〻須玉
依媛命宅は只すと訓ずとしたるは九の森紀の文なるとよめり古事記に日子坐
王娶近淡海之御上祝以伊都玖天御影神之女息長水依比賣生子丹波比古多〻
須美知能宇斯王とみえたるたゞすの名もあるなり姓氏録に鴨縣主彦坐命
之後也とし又賀茂縣主神魂命孫武津之身命之後也とも山城風土記に賀茂
建角身命娶丹波國神伊可古夜女とあるもみえたり○名に縄をたゞすとよむも紀
のとき也

たぐち 新撰字鏡倭名鈔に徑字をよめり步道也と注せり万葉集に直道
とも直字をもよめり斤に多のたぐちなるべしもよめる也今すぐなるみちといふべ
し

たゝる 崇をよめり神の禍をいふ也徐曰禍者人之所召神因而附之とみえたり
たちかゝるの義たつは腹立のそれなるべしちかゝ及た也又癘をよめり

たゝむ 疊字をよめり手に矯る義なるべし○拮衣をとるもたゝむとよめり靈
異記に牒をよめり牒收其衣とも見えたり

たゝく 神代紀に擣字を訓せり俗に物を撃をいふも義通せり敲を讀りか
ふ又くるまへたゝくは爪の義也靈異記に叩をよめり○古事記の歌にみえたるた
ゝきはしとあるは發語佛足石の歌にもそなはれる人とあるも足人なるといふ

たゝま 日本紀に策をよめり万葉集にいとひまなく孫々たゝまかるとよめり
大明録に言語不及處策心謂之機とみえたり○一説に万葉集の未は未乃
誤なるべしといふなりとぞ

たゝら 日本紀に蹈鞴をよめり文選に鑪をよみ新撰字鏡に鎗をよめり埃
囊抄に大嘗會の火桶丸三の湯藥温むるたゝらなとは世の始めの物なりしを後
冷泉院の御時焼けりといへり仲實

たゝらたて 吹ハ吉今をうくあれ惡しとうけせぬ人やいふなる

○たゝら氏ハ百濟聖明王之後也といへり周防佐波郡多々良濱に初て來り
けるに姓をたまひ山口ともいひ大内とも称せらるハ海東諸國記に世居州大内縣山口とみえ
たり筑前にもたゝら濱あり菊池武敏か尊氏と戦ひし處なり

たゝり 倭名抄に絡[土+朶]をよめり天工開物に絡篤ともいへり 延喜式にハ[木+耑]字を用
ゐしハたゝりが義なるへし令集解に線柱旧事玄義に綿柱とみえたり木を三股にし
て麻を巻物也といへり姓氏録に任那國主金多々利金牟居を欽明天皇に献
せしものも大神宮式に金銅多々利二基高各一尺一寸六分土居徑三寸六分とみえ
たりハ三寸六分四方の物を下居とし之に一尺一寸六分なる柱を立つるもの也
万葉集にうみをのたゝりとよめり糸をくる臺なり六帖に
但馬糸のよれともあはぬ思ひをハ何のたゝりにかけてとくらん
此歌崇禍を兼てよめり○かゝる物にたゝりて今あり○たゝりて牧東鑑にみえたり

信濃國安曇郡に大田ゝ井小田ゝ井といふ村あり村の上方に牧ある跡なり○万
葉集にまれをえなくるとたなくりしとあるはえなくりし也たなの約りた也

たなすゑ　日本紀に稱辞をたなすゑといひ祝詞式に御名代称々てとこしへにかはらぬを也
又称代たなすゑとよめり譬言と義同じ○湛字と讀も同義なるべし

たなふ　古事記にも戰ひを讀りたれば手也とあるを也よて合戰とも撃戦
ととはつるを

たなしにて　古事記に訓に云多く志てあるもたし反ちるれはたちてとよむへくて代羽
とのへてたなしてといふは崇め詞なるべし古よりの例格なるをみるべし繼也

たゞうと　凡人とよめり日本紀にも又非常民たゞびとよむべしとよめり直名
伊勢物語に二条の后まだたゞ人にておはしける時とあるに直人とみえたり詩經に
おけるなるべし源氏にもおほかたのたゞ人のおもひとえたり○凡人は清華
に限るる孫也よて徒然草にたゞうとといふはみかどの御ゆかりを給はるをいふ也とも
ありといへり平家物語にも蒼文を源茂仁と云凡人になるべくてといへり一説に親
王皇孫なるべき人といふ清華に限るよしあるを

たゞむき　神代紀に臂をよめり手は向の義也といへり又腕をよむ倭名抄にも
そのひとも新撰字鏡に胖もよめり

たゞみつく　日本紀万葉集にもたゞみつくの言なるべし青垣山に属け
よみえるは青山の疊重るもおなじき義なるべし柔膚ともつけりけり
にほへるしき也

たゞふみえ　草紙の末に多き詞也禮記に委字をよめり万葉集に疊有と
あるまるを楚辞の攝葉をよめるをも同じ狭衣にみくしは行へもなしず
はやくとたゞふりもあさてといへるは世説に髪委藉地にといふをなるべし

たゞよふ　古今集序にも雅の体也といへは正言の義なるべしおのづからを
喩とをもらしは旨のまゝにいふ也

△たち　日本紀倭名抄に大刀とよめり神代紀に横刀万葉集に劔なし民よめり
祝詞式に打斷物止太刀ともいへり截断の義なるべし野劔餝劔蒔繪螺鈿樋螺鈿
尻鞘黒塗木地などの名あり平鞘太刀は高蒔繪也白太刀は菖蒲草の帯
取なり持太刀は一向内々の物也衣冠直衣の時おせるべし六位以下は黒漆を用

り東山左府の説に金作剱ハ大臣以上用之銀作ハ納言以下用之といへりされど
も一定の法とはいひがたしといへり○東鑑に武太刀とも見えたり儀刀
に對していふなるべし大諸禮に大だち中半だちなども見えたり又白ぐち黒だち
あり万葉集抄にいるぞのたちとはふかくして土に身をつけざると注せりと
見えたり○たちハかたなに対していへるは古への例也天智紀に大氏之氏上賜大刀(タチ)
小氏之氏上賜小刀(カタナ)とみえ和名鈔にも大刀ハたちとよみ小刀ハかたなと訓り○
小狐丸のたちハ九條家の重宝也○小烏のたちハ平家の寶とせる所にて今伊
勢氏に傳ふる所ハわづか一尺ばかりハよれつまの平つくりの刀にて末ハ両刃(モロハ)也といへ
さゞ实まるところ○安南國の太刀ハ日本制の如く柄にハ縁目貫鍔鞘なく大体美
なる寸柄と鞘とを糸の両端にて縛て左の肩にかけ右の腋に下るといへり○蝮
をたちともはらひしまや延喜式に轉蝮(タチ)部ハ姓注丹比部とみえ古事記に蝮(タチ)之水
歯別命とも出たり○牛の病にいふを本草に馬病則卧牛病則立と見えたり
○虎杖(イタドリ)をむかしハたちともいひしか日本紀に見えたり○日本紀万葉集に等
とよめり誰たちといふも是也どもの循せる也○舘ともよめり建の義なりや序も

同じくよめり儀式帳にも寺の倭字なりし館の姓ハ盛衰記に見えたり○俗に
物にたちのよはびしいふなりともいへり様の義なるべし○万葉集にたち乃さま
此たちのはぞくさくといふは旅装也

たぢま　但馬とかけり田道間守が住し出なるよし垂仁紀に見えたり　但馬の
字ハ演繁露に見えたり○温泉ハ城崎にあり古今集にたぢま乃出の湯
ありけるなりといへり○出石の社ハ童之集にそねの好忠が但馬にていつしの宮にて
と見えたり出石郡に伊豆志坐神社八座と見ゆ

たちいば　撰集物名の部のみく事物所名なる犹たち入てよむといふ哉入の義なる
べし人の名犹よめるハ古今集に公俊とあさなみけるに見つる是としたのまよ
ひとよめり源頃俊頼などいへ已ヶ名にもたち入てよめり日本紀竟宴集なるハ惟宗
具範の姓名犹たち入たり

たちまち　忽とよめり神代紀に忽然ともよめり霊異記に奄然犹よめり万葉集
に急ともよめり急遽の意也倏ハ犬走疾也欻ハ風有所吹起也よて形容し
てたちまちとよめりトハ忽也暫也又猝(ニハカ)也とも見えたり梵夾に驀とよめり頓ハ

遠也と注を手たしかれゑ也佛家に頓斷の語あり探玄記に迂捷とあるにより
徒ハ通して斗に作る頓也と注を○たちまち草ハ牛扁也
たちかき　日本紀に擊刀とよめり今の太刀打也○たちとあるハ劔術なるへし常
州鹿嶋の住飯篠山城守家直より世に弘む其後下總香取塚原木傳是を新當流と
いふ愛洲移香を陰流といふ上泉伊勢守ハ新陰流といふ是を武備志教藝に影
流とありて猿飛猿回山陰などいへり
たちから　日本紀に税を訓せり田力の義也或說に大税を倉に貯へて春耕乃時に出し
てかして耕田のかとなる故に田力といふ也税又脫と同しくるの音○大神宮式に小
税大税斤税あり以五把為束を大税とし以一把為束を小税とするよしも式にみえたり
儀式帳に細税大半斤大斤に似たる又懸税あり倭姫世記に先穂を抜穂に抜しめ
半分大税に苅しめ云々抜穂ハ細税と名く亦大苅と号くとみえたり○租を日本
紀に訓と同うす令義解に謂田賦為租也とこそ
たちばな　橘と訓せり今禁庭南殿乃橘ハ幡まて橘のもろ木とよめるも現在
せり衆樹ハ遍照僧正の孫也石清水の坂まて祠前の橘かれんど枯んとする故

ろへく
　千早ふる神のみまへのたちばなももろ木も共におひにける哉
○其後橘を再び栽え衆樹を嬰ハ遷まて参議まてなるよし大鏡にみゆ
春盤に用るゆゑ也田道間守か絶域より採来れるなり日本紀にみえたり
よて田道ひとしいふなりや其裔橘守と氏とせり此種初て本邦に来る故りて名
城種によせるにや橘おほては最下品也此種ハ綿橘といつるもの也といへり○花橘
とよめるハ花状賞してへつる也後世盧橘を花橘とす後中書王盧橘の題に枝
繫金鈴春雨後と似たり盧橘ハ金橘也今金柑の名とよつり上林賦に盧橘
と枇杷とゝ共におけ李伯ろ詩にも盧橘為秦樹枇杷出漢宮と作されハ枇杷とす
る說ハ非也潜確類書にいふ盧橘ろ夏蜜柑にて夏に至りて熟するなる者也と
いへり顕仲の歌に
　秋宿のも橘の色みれハ金の鈴とそなりけり
○昔伐志のふとよめるハ田道間守か帰朝せし時に命せられし天皇已に崩し
給て自ゝをもまく哀れにたへすして死せるよりの事也古今集のむかしの人の袖

のうてきさりといへるよりの字なりといへり〇袖の香をよめるは南唐近事に鍾
傳鎮江西以昏日包橘致袖中有客覆射曰太歳当頭立諸神莫敢當其中有
一物常帯洞庭香とみえたり〇堀川百首に

引近てた橘のうつり香にはさめぬ袖を人そあやしむ

是は陸績か故事にてよめり〇ちりさすまりとある右近の橘の咲禁
中橘樹彫枯経日忽生花葉焚〻可愛と日本後紀にみえ康保二年仰左右近府被
移く禁秘抄にみえたり〇春盤に用る八万葉集に

橘は実さへ花さへ其葉さへ枝に霜ふれといやとこはの木

とみえたるによれる也續日本紀に橘者菓子之長上人所好〇橘寺は高市郡立部村
にあり〇橘諸兄公の墓は和泉國泉南郡にあつて藤原植通公此を立てり

橘のもとふみならしすまて見えは実さへなさへきみとそなりし

〇草橘ありなどとて名く〇蔵玉集に時鳥を橘鳥といへり〇立花城は筑
前にあり〇橘の小嶋か崎は山城宇治也古今集に

今もかも咲匂ふらん橘の小嶋か崎の山吹の花

△たつ 達立竪起をよめり日本紀に樹をよめるは木立のやうなるを書なるも樹徳と
ある白髪字をよめり名のつかひ風のさかるしき也雲のたつも同じさまとおもひ
ふかや後紀に八雲刺とみえたり万葉集に門立て戸も閉る所とよめるもさ同
したち初るはりとおりにくたち白くきまらつは歌にたつとやくとおのれけふ
口語に月日のたつといふの類也又たちをひくたちるとくふちつゞくそちかへるを
といへる皆同じ〇字彙に植は立也とみし又植蠶器用以架蠶薄者とも〇奉
る所立とのみちひらるは大神宮儀式帳に伊須〻乃宮仁御氣立止こは御食奉る
てふ事なり万葉集に山神乃奉御調等又常宮等高之奉而とみえたり〇足の
たゝぬは白氏文集に兀足不支とみえたり〇裁断ともよめり徒然草に妙観か刀はい
たくたゝずといへり今を剣刀にあらひて妙観は勝尾寺の観音の像を刻し観
音の縁日を十八日とするを妙観八月十八日に化せる所をてなりといへりさんしと
五祖山師戒禅師三十日の念佛圖に十八日観音を記せる倭の事のみに兆を又世に東
観音の称あるも東は十八日を約める也といへり〇閉る所をたつといふ辞祝詞式
万葉集にも多くいとを通せり門戸にならふよて戸障子と俗に立具といへり〇

龍と訓ずるハ有時てよく起り立の義也升龍降龍周礼ニみへ春分ニハ天
ニ升リ秋分ニ淵ニ入といへり法言ニ龍蟠於泥蚖其肆矣蚖哉蚖哉悪覩龍之
志也欤と見え世ニ升龍とよぶ者ハ多くて降龍とよぶものハ稀なり十月の比佐
渡の海ニは龍の降りて海ニ入る多しまた中山傳信録ニハ龍二見于船左右水
沸立二三丈とみへたり新書ニ龍変无常能幽能章といへり○扶桑略記ニ祈雨
龍穴とみえたるハ式ニ大和國宇陀郡室生龍穴神社とこれ也○龍骨ハ本經ニ死
龍之骨とみへたり讃岐丸亀の海より出しハ牙長さ三尺重さ三貫目色紫銅
のごとく播の高砂三浦氏の所藏近世小豆嶋ニ出し龍骨龍歯疑ふべき物ニあらず寸分
舶来の物或究むるニ多くハ木化石也倪朱謨ヵ要皆石燕石蟹之倫蒸気成形石化而非
龍化耳といへる説見得たらまし叡山西谿南峯側有大巖其形如蛇口舌皆備
其勢似呑と元亨釈書ニ見え濃州可児郡こせ村ニ近歳山崩れて龍頭を見ハ
せり口を開きたる体ニて大さ五六尺ニ及び人怖れてふたたび埋めりし
後熟視するニ石ニ非ず骨ニ非ず歯牙ハ黒色なりとぞ又水戸の宍戸ニ出る
る龍石ハ頭二間餘あり歯もそれニ准じて大也といへり是を又化石なるにや

蛇骨と称するも木化石多し又白石或焼たるもあり又山谷の蛎殻とも謬まる
ゝ蛎殻の高山乃大石ニ附きてあるハ西土の書ニもみへたり我邦諸山ニも多く
有てそれが中ニ一二丈ニも及び相連りて蠔山と称すべきもあり○信州のあ
るところハ彩の水をまたぎし跡ニ大石ニ渦の形ありて観つべし此を称それく
らふ○紀の熊野ニ舟渡しの岸ニ竹林ありて其より氣の発昇るを見る時ハ円ニ
雲おこり雨ふりまた其後竹林の主と共ニ竹林ニ入くるしに一株の竹枯て
班竹と成より其班文大ニ観つべしよりて龍竹と名つけ衣架とせし或ハ
しゝ人の物語なりしが今ハあるハ風雨をうけしかりけりとぞ○大和なる取
のあたりに龍石と称するあり此石ニ腰をかけて大ニ病なりし人多し
龍蛇乃化して石となれるものといへり○奥義抄傍頼の弟小
くちはしや雲ゐかくれにすむ竜もおなじ人ニはおへしけるの或
是ハ新房葉公が故事をよめり○尾張ニ水練者ありて淵ニ入て多く鮒を得
たる大木の根ニあたりまたそのふきあり其淵より龍升りて樹木ニふれて弊
るまかり一尺四五寸長さ三間がとの蛇なりとぞ其後その者鮒獲らずんとて右

乃渕にいりしに鮒も集りて木根をとへよりしかど○松平越中守殿奥州
左城の時家臣某池に住し龍を射て家に帰りぬ其夜龍来て其家をとま
わ倒をされしかの痍に疲れしにやさるに斃きぬる故にて眼をとり出し
隻眼を主君に奉りて隻眼を家に蔵めぬ其後伊勢桑名に移封の時右の家
臣所蔵の眼を揚柳寺の弁天社に奉納ありとぞ其眼年を累ぬと威光射
人ことし又土佐には海より春夏の間ハ度々龍昇る其辺の村々破損多きとて太鼓銅
羅法螺を集め公民是を逐ふ逐はるれば其効ありといふ○荀子に螣蛇無足而飛と
いふ者ハ今も天上せんとて竹木にのぼるをみれば皆ちひさやかなる蛇の蟄まて雲
氣ありて登するにおよんて其形大に変せりといふ是を指すならし○龍の上天は火焔
あたりを焼ける者多し埤雅に龍火得湿則焔得水則燔とも信ふ故へり○小
石中より龍の出たる物語古今多し恠石供すとも裁より竅ふ出づとあゝず○
雙角五爪龍ハ天子服御之彩紋也臣下ハ三爪龍也○五龍祭日本紀畧扶桑
略紀等に見えたり陰陽道の祭也○飛龍ありて候家の秘説ありといふ○龍
の奥ハ上野國山上郷也足利又太郎忠綱の居ましし所也○室生龍穴神社ハ宇陀郡

室生村にあり龍穴ハ呉都賦にみえ白湖東新平縣有龍穴常以請雨也

たづ

倭名鈔に鶴をよめり田鶴也といへり劉長卿の詩に田鶴稲花中とも
みえたりたづさハに鳴とハ多く集り鳴をいふなり○たづの大臣(オホイ)殿をましハ
名たづなるみ也と徒然草に見えたり

たづぬ

尋をよめり又温をよむハ韻會に習也といへる白原字とよむも日本紀にみえ
たる事の起りを尋める也論語に繹とよみ霊異記に推もよめり○播磨出
雲土佐にとめるといふ万葉集に尋字をとめるとよめり

たづき

万葉集に方便を訓しつゝに頭を用ゐ又田鶴寸ると出たるは濁る辞なるし
手着の義便りの意也といへり跡状と出しも同しく訓むへし又たづきとも
見えたり○倭名抄に鐇をよめり廣又斧也といふ杣人の用る物也山たづの
條に併考へし古斧に
手斧うつ檜原の山のさびしさにたづきの音のかのなるかな
伐木丁々山更幽の意也又古今集に
をち近乃たづきもしらぬ山中におぼつかなくもよぶこどりかな

ひきあぐる義をかねてよめるなるべし儀式帳に立削鉾(タツキ)と出せるも鐇の事なるや
さしバつを清てよむべし

たづな 手綱の義轡也といへり全浙兵制に轡縄とみえ中山傳信錄には勒弓索とみえたり公卿ハ蘇芳の緂殿上人ハ揀の緂六位ハ紺の緂なるよし物具抄にみえより○体源抄に八幡殿の着鎧の次第を出せしに第一に手綱とみえたるハ下帯の事也といへり大諸礼なるもみえたり後にたんなといへり

たつた 天武紀に祠風神于龍田立野とみえ祝詞に我御名者天乃御柱乃命國乃御柱乃命とみえ式に大和國平群郡龍田坐天御柱國御柱神社二座とみえたるを今も立野といふ所の社なり今龍田といふハ法隆寺乃邊にありて神幸の地なりといふ龍田村といふ又式に右に並びて龍田比古龍田比女神社二座とみえたるも倶に立野村にあり法隆寺より二十町斗也万葉集に我ゆくハ七日ハ過し龍田彦ゆめ此花を風にちらしそね山おろしの風な吹そと祈て名におへる社に風祭せる龍田彦ハ級長津彦命龍田姫ハ級長戸邊命なるべし式に別に挙るよしも荒魂和魂なるか祝詞にも比古神比賣神二神を挙たり後の世乃哥に龍田姫とよめるも是也○龍田越の事神武紀にみえて今いふくらがり嶺也

たりみづ 万葉集抄に立水ハ湧出て流る水也とみえたる立波などいふもし

たづさふ 携字をよめり手を副の義なるべしたづさはりといふハ霊異記万葉集にみえたりハリ反ひ也○新撰字鏡に攜を見ひきゐてゆくとよめり

たつのぞく 建除満平定執破危成納開閉の十二字を十二直といふ暦の中段に入る是ハ五行家の内に建除家とて有り史記にみえ唐詩に建除体あり鮑明遠より起るといふ我邦にても治文雄か詩経国集に出たり

たつのみち 禁中の龍尾道也盛衰記に龍のきうぢといへるもこれにや

△たて 縦ハ立の義也經緯の經をよむも同し○盾を訓するハ隔の義也神代紀にみえたり鹵簿乃義也よて一名楯也元の木くさの木なるを用ひといへり鉄楯白楯皮楯ハ日本紀にみえ歩楯(テ)ハ和名鈔にみえたり今持楯搔楯乃名目ありてもの戎器に手太平記にひしぎたてといふもとみえたり○俗語の人にたてつく何ぞくそになといふも楯より出たり○海の漁つりたてといふも隔の義成べし箔を楯く

するなり嶺表録に跳鯅といふも是也たてがしたてあくなくもいつて伊勢志摩に日
を期して魚取といふ○たてハ崎と紀刕熊野にあり増基法師
うら浦にみちくる潮のたてかけ浪看ハ時とハいふまじく有けれ
姓なといつり義仲の将楯親忠あり信濃人根井行親の子也

だて

何ぞといふ辞ハ何ぶるといふに同し○だて風ぞとをとるなといふハ男だて
なといふより出る詞成へし治容を譯す男をたつるとといへハ立の義なるべし一説に
関東にて小六なる者りと伊達氏某が僕也游俠放曠の徒より時人是を伊達小六とい
ひしより始る或説に寛永上洛に仙臺侯の従士衣類殊に美麗なりしかハ京童の彼
ハ伊達人と云しより起る○俗諺に賢者ひだるしだてさむしといへり○伊達なよむ
ハ式にえびす射楯と同義なるへし東鑑に伊達絹も見ゆ

たてば

日本紀に所植とよめり古今集にそふたてりける梅の花を折てといひ又
我るへしうしくえつてそゆきをとくる男山ふしたてりてくもあれ
といへるも是也○花をたてるといふも同義なへし花をとのけるといふは生きの義なるゆへ生
殖をおほしたてるといふにもあへり後撰集に

折つまハたふさにけがるたてながらみ世の仏に花たてまつる
されハたて花といひつり新千載集に比えの山乃念佛の立花といへるより今立花と音
に呼ハ誤なるへし植ハ杖我を立るを同しちの音也うるう時ハちよくの音也○茶をたた
てるといふを發るを謂といふなり大觀茶論に拂撃無力茶不發立とみえたり○轎
をたてるといふハ立るを西土にハ坐といへり

たてわき

帯刀とよめり日本紀に大刀佩とみえたり古今集にもたちはきとあり今
も上總国にハたちはきといへりとぞ○古刀ハをくとらてありし今つけるといふを
式正にハあらすとぞ○禁闕に滝口と称し仙院に北面と称し東宮に帯刀と称せて
皆近衛府より分ち補せりとぞ

たてまつる

奉とよめり立て帰順の義也ふてるハ立君なといふへし匡謬正俗
に奉者皆謂恭而持之とみえたり一説に古事記に立奉二字をよめり献る我立て
たてまつるといひ奉ハまつるとよむかりもよめハ也

△たど

伊勢國桒名郡多度神社相傳て国常立尊を祭るといふ摂社に一目
連といふも其の変化神也と国常立尊ハ國底立尊ともいへりせハ猿田彦神

ともきをし也伊勢國中大社二所ありて多度と阿射加と也共に猿田彦神を祭れるを一宮の神も亦同し

たとふ　譬喩をよめりたとへるといふへる反ふ也たとへバ何それにたとへて云への
さるゝ俚諺にたとひといふ又作辟大学の辟をもたとへとよむへし

たとほ　行道のおかつらふをまへるおくめくし尋ね迷ふをいへりよて真名伊勢物語に尋字をよめり手取の義といへり拾菓集に八蹢字を訓せり説文に足不正也注せり躑躅と訓どへきとまや詩注に行不進也と見ゆ或ハ蹉字をよめし字昏に跟也とのく注して其義见えを

たとひ　假令をよめり或ハ音をよみ假使も纂要に逆料之辞とも又假饒も直饒も設使も饒令も縦饒も同し譬使も同語也即字就字設字縦字をよめり一字く二字ハ緩急の異也任をよむハ俗語也神代紀に若使もよめりもしと相通ふ辞ふしく共に設くる辞されともたとひハ未来とらふる也といへり

たとふる　古今集の序に見ゆ寄の体也といへり即万葉集の譬喩寄也

△たな　日本紀古事記に板擧をよみ倭名抄に棚閣をよみ姓氏録に析をよみ新撰字鏡に榭又庋をよみ常に棚とよむ○類聚雑要にも棚み也○倭名抄に蒲公英を訓せり田菜の義なるへし○俗に店をよめり坐賣物之舍也といへハ棚に義同し今たふなんせ也○万葉集に身をも多恭不知とも事ハ棚知ふともみえ白たなしひ知得る事也といへり

たなれ　万葉集によめる手馴の義也たなれの琴たなれの駒たなれの鷹なとよめり

たなびく　起靡くの義神代紀に薄靡を訓し万葉集に霏霺をも軽引とも靉靆とも訓せるし祝詞に靄もよめり皆雲の棚の如く横に引をいふ
○たなひく雲の絶間よりの詠ハ新古今集に崇徳院に百首の歌奉りける附とえゆ秋風にいふるけといへるハ心つくへし　清輔朝臣
ひとすらにいとひも果し村雲の晴ゆく空ハ月ハ照まさりける
此心全く同しされともせ歌ハ台詞を存して意くまさるもの也○顕輔卿父ハ修理大夫顕季卿也

たなさき　掌前の義鷹の左の羽をいふ也又たなさきとも見えたり定家卿

さしもの身よりたくさえかうまうしあらゝし人ハ右を尊し
今たゝをうかハ武用のたゑよ右とはゝりどしいへり一説よ文官ハ右武官ハ左の古實
也とぞいへり○後西園寺入道相國の鷹百首よ

たかさきハ角の柱をかりてやはこしのまよ鳥のとろえん

延喜の御門の御時鳳輦の左の柱をとりそて御こしの内よく乘ゑすゑさせ
給しより今の代までも鳳輦の左の柱とりはゝけつまる者よ告るといへり

たかをくはゐ

倭名抄よ織女を訓せり万葉集も同し棚機姫神として神衣を
織しめたまふとし古語拾遺よ見えたりよて織女をたなばたつめといひしより
織女星とも同しく名くる歟一しつハ助語なり織女の年よ一度牽牛よ嫁ぞ
事ハ齊諧記よ出たりたなばたを妻てふ名によるゝハ謬なり神代紀の字よおくたなば
たとよめるハ牙棚機の義也○伊勢家集よたなばたよかりなるかしいひて遠私門
院右京太夫

こゝろやれふいりの星の物かうりたりなひの水よはしまさらハ

○七夕と義訓すゝハ後世の俗也理なし万葉集よハ字ぬか此義しよあり○宋時節序皆

有休暇唯七夕有司皆入局不准假と委巷叢談よ見えたり○七夕の歌よ糸をよむハ月
令廣義よ是夕人家婦女結綵縷穿七孔針とみえたり祓りひの糸ハ白居易か詩よ
憶得少年長乞巧竹竿頭上願絲多と見えたりまたけの糸ともいへり○庭の琴
を七夕の琴也哀をよむハ竹林七賢傳よ舊俗七月七日法當曬衣とみえし七夕の雨
を洒涙雨といふよし歳時記よみえたり源頼ゟ歌よ

織女ハこゝろよ糸ゝんこくよ此糸くハゝりまつる心を

是ハ古文類聚よ京師七月七夕婦女望月以小蜘蛛在合子内次日看之若網圓正
謂得巧歳時記よ出祭時陳瓜菓於庭中乞巧時有蟢子瓜上網以為得とみえたり
○信州松本の七夕の風俗よ縄をはりて家ゝ家ゝの軒よかけ路を横ぎりて張
木の人形よ紙衣をきせいくつともなく彼縄よはりさげるといへり○御湯殿
の記よ七月七日七色ゝわたしのけしき御歌御鞠御碁御花御貝おほひ御楊
弓御香ありとみえたり御硯七面御筆七對梶葉七枚梶皮七條を飾りて其梶葉
よ御歌を御染筆ありて也内ゝ行事よ梶の葉七枚よ書○同しまんこいとの子を
入させたまひくまくつとて御湯殿の屋根へあぐるよしとみえたり俊成卿

天の河とわたる舟の梶の葉に幾秋かけつ露の玉つさ

○星夕ハ御硯水江刈山邉邑星の井の水を用ゆ七月初旬に文殿の官人下向し
採來といふ○牛女の交説ハ五雜俎に辨せり貫之家集に
かきくらしことしもえぬたなばたのまつにふかく名のたてる覧
たなばたのみに　祝詞に手長御世とえくらう手長の大御世又手長の御壽とも
いへる手ハ發語也といへり

たなゝし小舟　万葉集に棚无小舟といへる舟ハ舳にも艫にも棚ありといふハ非
也これも板一枚といふ棚もなきといふ事也童蒙抄に棚とハふなばたのふなだなにまうくる板
といふ船也至てちいさき船にハ棚なきものありといへり和名抄に枻をふなだなとよ
めりと伊勢物語に
河しづかなるたなゝし小舟にてそこひゆくらん人あらん人ともなく
といへるハ古今集に
堀江こぐたなゝし小舟こぎかへり同し人にや恋わたるらん
読なして作れる也

△たに　谷谿溪をよめり岳の岑山のかひをいふ也たにとほと韻通ゆゑに山
城國乙訓郡の神谷を神名帳に神足と書し伊勢國度會郡の井谷を
類聚本源には井足とみえたり○蝻をたにといふも背の上くぼみて谷
に似たる故也と砂石集にみえたり蝻ハ蚋の誤なるべし牛蝨也○商布を
訓たるハ倭名鈔にみえたりたハ手也にハ布也手作布といふなるべしといへり
文徳實録に交易布といへるも是なるべし○蛮國の名にいふたは泥と書
是其の三佛齊也といひ又かしとハ暹羅の内にて今は別国となる此國女
王也といへり慶長七年よりまた入聘す

だに　欲の詞にいふハ万葉集に尚字をかけり在満云さへといふ時ハ其上にまた
いふ意に成だにといふ時ハすこしといふ意に成さるハ物二つにわたりていふ
事におほくてにをはも然れども是ハ物の外にかゝれる時におほく引かけたり
一ハ上に従ひかゝりてたにといふだにハ上の詞をたすけあげさせて強くいひつゞ
辞なり拾遺集に
衣だに中にありしはうとかりきあはぬ夜をさへ隔つるかな

こハだまとさへしぬ一夜だになくして又新古今集に

　うき身をハ我だにいとふいとへたゞそをだに同じ心とおもはん

これハ一首のうちに二所ありて耳にたゝねど又ことと聞ゆるさ拾遺集にも見え

ゆ上へかへして見るべし又新古今集に

　ふかゝらぬ外山の庵の寝覚だにさぞな木の間の月はさびしき

これハ深山月の趣也寝覚にだにしかるに况深山ハましてといふ意を含め

まかしことをいひくだしてのこゝろさばよくいひまはしたる手也といへり

又多くハ嗟嘆の意にいふ辞なり古今集に今よりハうゑくだにみじとよ

めるハ俗語にていはゞうゑくさへ見じの意也といへり○だよの詞たるを除く

四季の言を意の言とよめる新古今集六百番歌合などに見えたり○駄荷の

音なりといへり呉音なり

たふぐ　蝦蟇といふ也ひきがへるをいふ蟾蜍と蝦蟇と通じいへるハ漢籍に

も多し万葉集に多爾具久能佐和多流伎波美又谷潜乃狭渡極とも祝

詞式に谷蟆能狭度極又谷蝦蟆などみえしるされたるハたにぐゝの義也一歩の一寸

にもたらぬと物の使を極くの譬とせる也㊀古事記に多尓且久白言且字音を取

れるハ例なし具字の誤なるべし此物の霊異なるハ漢文にもみえたり

△たぬき　舊事紀に手貫とかけり今ハ臂鞲といへりしるだぬき也倭名鈔に

たまきとよめり古画にみえたるハ今弓小手といふ物の如くみじかく見え

ゑといへり○狸とよめり此皮手貫によろしきゆゑなりて名を得るなるべしされ

貉ハ逸物にて狸の油をもぬるなりといへり貉だぬきによりて然るべし

○老たるハよく変妖して人を食又化して人となる又よく人語をなすと阿波

の家中ハ市中の躍すける事ありしに明和年中に児女の中に交りておどる

家に至り酒食かくて風流を尽して帰りけり狸の化たる者途中に死たり

衣服編笠のまゝにしのびやかなりしとぞこハ犬のしわざ也といへり○狸の腹つ

づみといふハげに其音鼓のごとし拾玉集に

　人もすまぬ鐘も音せぬ古寺に狸のみこそ鼓うちけれ

○偽眠を俗にたぬきねいりといふ本草にいふ狢睡也○狸ハ年をへたるハ

律に於塚墓燻狐狢と見えたり○西土の昔に往く人家に狸を畜て猫のごとく

駉志めて鼠を捕ふ此にいへり本草に猫狸兕狸風狸九節狸玉面狸なとの名あ
りまた野猫を狸の一名とせり安永乙未の冬伊勢鈴鹿郡高宮の辺にて
異獣ある殺を旅人視て曰是風狸也と示りさありきといふ○蝦夷にもおほく阿蘭陀に
たぬきといふ○庭訓に狸澤渡見えたり

△たね　種をよめり田根の義なるへし

たねかし　攝州住吉郡に種かしの社あり神名式にいふ多米神社是也かしハ
神代紀に為飯をかしくとよめるを也種を漬ることいへり後頼卿集に
○秋かりし室のおしねをおもひ出て春そ田なかに種をかしける

△たのし　楽とよめり日神乃磐戸を出たまひて群神よろこひ悦し
よりおこれり古語拾遺にみへたりたのしみたのしふたのもし皆通
せり般ともむと通せり○日本紀に貴盛とよめり万葉集に貴在をたのしかり
けりとよめるハ楽にも通ふ也又豫も楽とよめり

たのむ　頼恃怙をよみまたたのむともよむなるへし手祈の義也又田実より
出たる辞にや孟子にも豊年にハ多頼とみえたり古今集に

秋風にあふたのみこそ哀しけれ我身むなしくなりぬとおもへは
秋風にあふ田の実のいしねも也伊勢物語に
山城のおほかみのおほみよむをひたのみしひとなれ世ふりけて
といへるは憑に手飲をそへたりといへり口語には多く北のかたにいへり○八朔はたのむ
乃義といふ田実の節の義也秋邦乃風なれと秋実の成熟をことふけたるけ
て私家にも年せしおこりてし四季物語には小松帝の此より始りしと
みえたれと延喜式にはたしかなるものせす國史にもさきたれし公事根源に文永記
を引て建長乃比より始りとしるし康富紀に後鳥羽院の御時よりのよし
也とみえ園太暦康永二年始有八朔之贈物とみえ本朝通鑑に貞和元年八月
朔賀佳節各互贈物とみえ正應三年　御記に今日家のいとなみまそれむ
ふ物をおくるにてはなはた多くあまりけんとみえ二水記に八
月一日今朝御憑之御禮御太刀進上とも見え御湯殿記にも八月一日御たのむ
年ことのことくまゐりしも也堂上方よりハ太刀献上草の太刀也將軍家に
ては馬を献したまふ將軍家并[illegible]乃御祝侍りて諸家御劔御馬なと

献せしむる元正の如し京の市中にハ行器を贈り大坂ハ薏苡の枝に彩雀つけて
贈答す月令廣義に八月朔作飲食為饋俗曰饋臘とみへたり饋ハ新穀をも
祈る祭の名也といへり○八朔ハ正しき規式にあらねど風俗といふ晴にあ
らず褻にあらざる成りとぞ也○たのめ乃里ハ夫木集に

一 信濃なるいふ乃郡とおりふれハたれかたのめの里といふらん

此郡南小野村に八彦大明神ましぬす八朔の神事をたのめ祭といへり○さの
名てといふハ契りたる事成おもひれすて故にいふ成後にハ郎契の事ともお
きつらといへり伊勢物語に女にかはりて

浅からぬ袖ハひちぬめ涙川身さへながると聞きもたのまん

たのをとかくと 伊勢物語によそしたる名本田面鳫とあり諸抄と同し六帖に鳫の
部に入きり

△ただ 把とよめりさげての略語也日本紀に把又條成たゞりとよめるも同し

たゞけ 日本紀に淫字妍字通字或ハ結婚とよめりたされも同しきこゆけと
同韻也新撰字鏡に婚をたはるとよめり○俗に人を罵るにいふをこれなるも

たはしま 日本紀に靡をよめり秋くれハ野べにたはるゝ女郎花とよめる是也新
撰字鏡に媱字 妖字をたはしとよめり

たはふれ 戯をよめりたはれ觸の義成べし新撰字鏡に謔をたはぶるとよめり

たはこと 妄語をいふ謡言也光仁紀万葉集にもみえたり譫語も同し新
撰字鏡に誑又訛をよめり今うはことといふはうれの事なるものを也

たばかる 日本紀に方便をよめり俗に人成たぶらかすをたばかるといふ謀を
よみ謀しくる也○神代紀に慮をよめりたハ手の義たゞはかる成いふ測計
なとをもよめり物語の詞にも謀ごと多し一名伊勢物語に議をよめる○
同書に手量とかけるハ柏子をいふ筋柏子手柏子乃義なり

ただしは 万葉集に手走とかけり疾定るの義俗にとりしるといふに同しあ
きなしかよめり又たハ例の発語なり

△たび 旅をいふ日本紀に行をもよめり發日の義成べし羇行も旅行も行度を
義同し○西斉閑出に羇旅ハ大なる旅也國をも多く過ぎてたびやうに
よむべし旅字をかりの附ハ事をを限りをもみへたり○度をよむも同事なり

よて万葉集には段字をよめり全漸兵制に二次をふたびと訓せり○旅路
旅寐 旅枕 旅衣 旅の舎に旅乃宿 旅のおち旅の空なとよめり万葉集に客を
よむは客は訓也旅は客舎也と注せるによれり○文木集に

都いてゝいくかも旅をふるさとにもむすへ草のまくらに

ならぬかゝど旅のありておほなびとは家によむましき事也といへり易に旅之六
五不言旅程傳に五君位人君無旅々則失位故不取君義とみえたるが如し○思ふ
子に旅をさせよといふ俗語は程子も旅に在ては謙降柔和なれは自保すへし
といへるとぞ○万葉集に

櫛とかんじ屋中を掃はく草松旅より来る後なども云て

仙覚抄に人の物へゆきたる跡には三日は家の庭掃ずとぞいふ櫛をみえとらする
ある也とみえたり○手火は万葉集にみえたり日本紀には秉炬とあり今も炬に幾
たひといふ是也○足のたびは倭名抄に野人以鹿皮為半靴名曰単皮といふ鎌倉
年中行事に鎌倉殿くさりの単皮めされしとみえたり全漸兵制にもかくあり
いし軍用に貫きと称せし物と一物なりしを世人常用と成しより其制も変じた

れと旧名を呼しにや木綿たび今の製乃如きは長岡三齋の物初て製す三齋足
袋よよる也今いふおは襪子によりしよて中山傳信録にも襪を譯せり足衣也と注
せり襪はめし韈也バツは音也べつの音にれしと分異なりさきは旅まで物と
物にもみゆされば其分にや昔は皆革を用ゐて女は晴に紫革を用ゐ紫たびといふ
寛文延宝の比までありしとするよといへり今足袋とよむは大双紙にたしふくろと
みじ世に文の皮なる皮用ゐしかをとらへり元朝廷諸臣諸社神人足袋御免なけれ
は着せん正和二年記に足袋御免之事 革襪年齢五旬以後可被免許但雖不及耆
齢為病体者蒙御免可着白革燻革とみえたり

たひら 平とよめり手枕の義也といへり俗に掌を手のひらといひ又物の平かなる
を掌のかしといへり一説に田開くの義也ともいへり童蒙頌韻に夷をよめり
○今乃皇都平安城をたひらといへり日本紀略に子来の民謳歌之輩異口同辞
号曰平安京とさいかゝさは氏よりなけし徳号かの霊墓霊沼と美と等しくは古記に
古記を引て東有厳神西御猛霊厳神者加茂明神也猛霊者松尾霊社也依
二神之鎮護期万代之平安とみえたり

かふ乃日の池はやしろみおもしろきなりハ千世しるハきくかや
○飛驒信濃の地名に何平といふところ多し山坂の内に平地なる所は村里とするを
もてなり○平姓ハ桓武帝第五子葛原親王孫従五位下上總介高望王に始て
平姓を賜られしよりなるべし
たびし　日本霊異記に礫をたびしとよめりたびハとぶにて通じて飛礫の
義也貫之か白川大相亭春子日會序に年杖たびしがりまで松の千歳ハ君
によりて祈りて花のさかえと人のためにとねがふとみし枕草紙にはさきみかハやう
どたびしがりしといふまで源氏にたびしがりまで呼ひ出ふるといひ類聚
に山がつたびしうちまでもとえる石礫の謂也元輔家集に荒怱りて大貮の
御門に菩提子なり上てまゐりけり
みかしん玉乃光をたのむかれ数ならぬよびかはかりとも
百姓をいふしある説を右の草木石礫までといへる義より轉じてもて下賤
乃者をいひし詞にあらざるや
△たぶ　日本紀に賜字をよめり今をたまふをたぶといふ也○耳の齒珠をいふ倭

名抄に耳瑞をみゝたびとよめり又びくさもいへり○たぶのよしあしハ神相全
編に齒珠朝口者主財壽貼肉者富足と見え太平記にも耳のびくら厚く
おりしけると見えたり○関東にて髪かつらをたぶといへり○湯氷にたぶ
くるといふも湛浮也といへり○出羽にて水埜をいへり
たふ　太布の音也たふぬのといふも重言なりといへりされと信濃國伊奈山中
にいふたふぬのハ楮の皮にて織て服とす或ハ拷布のきれ名なるやともいへ
り又一説に津輕のあたりにハ郎ふのみを布也といへり○利未亞洲に大布
と名け狼状乃如き者ありて其身を斂まして其手足を人によせて人の墓を
究て人の尸を食ふと見えたり○材にたふといふハ擽撐の示也○堪とよめり
任とよむハ公任乃類能をよむハ長能の類任ハ史正義に堪也と見え白堪任ともいへ
連用して能通して耐に似る漢呂の注に耐ハ堪也とみへ又堪耐と連用を勝と同し
韻會に任猶剩と批立ありとも皆たへぬとよめり不耐不勝をたへずとよむもの
也ぬは人ぬたるとして也けりけとりふかとも一つぬ淚不禁とも醫書に小便
とれ尿をもりとも小便不禁といへり○源氏にもたふまじけるとみえたり定家に

たふまじきあるとより後のおほかたれとて悔しき心にならひなるに
たふる 倒とよめり仆を僵も同し霊異記に顛沛を訓を又蹶とよめり倭名抄に狂とよめるも心乃顛倒せる義也たふるゝは彼よりいふ詞なり○倒る所に土はつかむといふ諺は今昔物語にみえたり今俗にけとれて次ほなるともいへり○斃は獣乃死ならひ人にも枉死なりとたふるに列仙傳に二君家有斃者とみし又中臣祓にもたふしとみえたり或は殪を訓せと
たぶさ 日本紀に腕とよめり手総の義後撰集にあつまにはたぶさにけがるといふ也○たぶさといふは俗にもいふ頭髻を日本紀にたぶさと訓せるの畧語也鎌倉右大臣集にはゆひそめてなれしたぶさのこむらさきとよめり
たふけ 嶺といふ峠字は倭乃俗字也手向の神多く坂の嶺にまして越行人は心をこれ祝手向をたむけを略してたふげといふ也といへり万葉集にかしこみとのらずありしをみこしぢのたむけにたちて妹がなのりつ
たぶさ 東鑑に田文とみえたり田地の文籍也神鳳抄にも田文曰と列ゝ津國豊嶋郡南々村あり社司の今西氏に田文といふものありてたてまけいふ引て亦横四けいありて山川田畑墓原なとつゝ横に合てあり其最初に文治五年御検注加納田畑取帳とあり前に壷水郷御枚檀坂とてあり封の内また数吉田不輪田なといふもあり不輪田は一人受持て田を持にせざる田地のことなるべし○拾芥抄田籍部に凡田以方六尺為一歩卅六歩為一段頭一段為一町頭十段為一町積卅六町為一里此六里為保々起従北行於南限於卅六條里起従西行於東限卅六里町始艮終乾但巳上可随国例とみゆ令後の制なれは令にのせたる三十六町ぞ路程の一里とする事是より出
たぶて 万葉集にたぶてにも投越川づべき天の川と詠り飛礫といふ也今つぶてといへり
たふし 神代紀の手にも由貴をよめり皇代紀に貴盛をたのしさともたふとみともよめり催馬楽のあなたふとといふを楽しきを也といへるは義通せるか万葉集にはたふとくもみえたり又たのしとといへり
たふさぎ 神代紀に犢鼻とよみ新撰字鏡に褌なともよめり股塞の義也今も上総に此語せもり漢書に犢鼻褌とみえたり釈名に犢鼻褌は貫也貫両脚上繋腰中下當犢鼻と

犢鼻ハ足の三里の上に究處の名古かゝる制の物ありしにや兼久記に従ひ木ゝ字
治川を渉りし時裸になりたふさぎばかりなるかゝそしとみゆ今乃旅服引のれまそ
ふどしみなは渉りしといへり○袖中抄にはからのふさと後ろより立引まふさぎとて
用ふといへり○漢語抄に松とものふさぎれたふさぎと読り○たんふとうふものハ相撲
なとの時に馬の手綱とりて肌の帯にせしものいへりたばふ乃略せる也西土にも兜
肚とて嚢の造り前陰を掩ふ制あり
たふとうれ　新撰字鏡に猖獗を訓せり自尊大になる訓なるべし
たぶらかす　誑字とよめり誆と同し又詩経に迋字もよめりぶらぶ反也手術
すのまぎれしあやたぶらかしもみえたり
△たへ　神代紀に妙字をよめり和妙荒妙白妙など妙なとらにも也感に堪て妙と賛
するの辞也○絹布乃名にいへるハ古事記万葉集祝詞などに栲とよめり日
本紀乃字にたへのもとは皮にて延喜式に明細布照妙なとみへ古語拾遺に
織布とありたへとよめり後世にぶんあり○万葉集抄に白き色の絲なくに
ふとしふき白栲白細布をもろふとよみ雪穂をたへのほとよみ穀白とも

ゞゝえと読るになれり○姓に勝とよめり肌の訓の略と又堪に同し○あそ人
妙ハ江口乃遊女也新古今集にみえたり
△たやめく　枕草子にいたうあくれハいうじふどもをたわめうしごわめくこゑ
ありけれとみえたりたゝめく意なるへし
△たま　珠玉とよめり海に生るを珠とし山に生るを玉とす令義解にハ自然の
物を玉とし造作に出るを珠とせり○後一條院長元七年八月に祭主輔
親大神宮に参籠の時神前の松樹より碧玉一顆を獲らうし事屯経記
百練抄日本紀略などにみえたり○明和九年の春紀州みの浦に水手の妻出
産しぬ其生児乃左手握りて開かず十日にも及ひ湯あみせし時開きたり手
中に握りて居たる玉ありて形三角色白く水精のやうにして光彩ありたけ六七
分ほどなる也波多氏親く見て其母に語りぬ○摂州廣田の社乃珠ハ中に剱
形あり諸社事にハ是を神功皇后の如意珠し寺蕉堅稿などに西宮剱珠絶世之
奇観也となしたり○古事記に璵を訓せり兼名苑に球琳琅玕琨瑤瓏球皆美
玉ノ名也とみえたり○類聚雑要に瑿丸玉みえたり説文に美金与玉同色者曰瑿といへ

是○讃岐高松に声ありて鳴玉あり大さ酸醤(ほゝづき)のごとし神宮車舘に貝の
ごとく両頭に尖あり重さ三両ばかりなる玉あり○魂魄をよめるも身の玉の
義也○雛をたまともみともよめり舊事紀日本紀に見えたり草木の実を
玉といへるによりて也李白詩に意願重瓊雛とみえたり○鉄炮の玉は弾子也○
玉乃うてな玉のみぎり玉のみとし玉しく庭などいふは禁闕に詠ましといへり○
露の玉霰の玉瀧波の玉などいふは似たるをいふ也○まへて浦に珠をよめるはかひの珠に
據たり合浦の守孟嘗が還珠の故事をよめる也後撰集に見えたり○古事記
小璁とよめるは説文に石之似玉者とみゆ○玉田宿祢あり玉田の字舊唐書にみ
ゆ

たまも　日本紀に玉藻とみえたり玉は称美の辞又實のなれるをいふ也またに白玉の如き実多き
藻あり○玉藻吉は讃岐の枕辞也万葉集に見えたり吉はよきと呼かけたる辞なるとして
かり玉藻なびく依寝し玉藻成靡(なひき)寐し児(こ)とよめると同し玉藻の字禮記にもみ
○玉藻かる井手しがらみ詞にせし事新勅撰集に見えたり玉藻かる舟とよめるは藻かり
刈之の舟也○玉藻の宿玉藻の床玉藻の枕などは水辺によめり万葉集に人のまろ

やどる所多くなりにきこれど人のうへに玉藻乃床とよみたるは新勅撰集に一
首ありそれの守正治御百首に出て玉裳のすそといひ役なく載しきたるはいふなそ
やしらつり玉藻の貝は藻につきし貝をいふなり○玉裳の義もあり万葉集に成
とありがたきものゝすそにとよめるなど是也玉藻に書たるは後撰集よりみえたり

たまふ　給字賜字などをよめりたまものといふを賜物の義也○祝詞に給ひたまふ請
めたまふとみえ三部抄におりふしいたまふと云詞はつかはすにつけて給ふといふ詞は自得
の義也よて古へは上下に通し用ひ又自称にもいひて今はまぎる詞となれりよて御字を
よみての東鑑にもみえたり文霊異記に御をたまさめたびしとよめるも同し○古事
記に諸尊より天照大神へ御頸玉を賜りし事をいつて賜ふる乃詞へこれより出たる
なり○賜る所もてあそび物のよりてあそびたらふは音便の習也

たまき　環をよめり霊異記にも玉纒の義なるべし古へ指環臂環耳環などみえたり
新撰字鏡に釧をよめり一説にきはくま又輪のごとくめぐらす詞なりと
もいへり万葉集にもまきしのたまき乃玉ともみえたり○日本紀三代實録
に手纒とみえたるは臂鞲也倭名鈔に射鞲をいふ一云小手也とみえたり

万葉集に手結(タユヒ)とみえたり又倭文(シツ)手纏とみえしは賤のをだまきに同しと
いへり○熊野玉置山荒祭神社は火神といふ岩屋にまします崇る地なり
○魂は貫ともいふ大魂乃足の指にさすを具也たぬきの條にもみえたり
もし魂乃雲井代さして忘れなはたまのとよくさかねなんよ

たまひ　日本紀に反吐をたまひと訓せり神代紀に所唾(ツハケ)神を速玉之
男といへるより出たる詞なり○田舞は大嘗祭にあり延喜式にみえたり多治比氏の内
舎人等伏儛人と云今は伝はれり伊勢大神宮田殖にも田儛仕奉といふ事儀式
帳にみえたり

たまけ　日本紀の訓にもる玉笥の義飯を入うつはとみえたれは飯笥の事なるべし丸形
の義なるべし或は臨安江新塗縣に玉笥山あり○北國の俗物に驚くをたまふ
詞は魂消の義別賦に黯然銷魂とみえたり筑紫人はたまされたといへり
きれの反け也西行の哥に
いかに伏しやきけん人のとこなくてたまされしか恐もあるかな
源氏にたまさかせたまふとみえたり○土佐の西境にたまけるといふ薩摩より

たまかるといふ下総にちゆうしといふ津軽に動転しることをいふ

たまや　栄花物語にみえたり魂屋の義今も御廟をおたまやといへり源氏にたま
どのといへるも同義なるべし　葬禮記式に殯殿にあり

たまえ　玉江といふは葦にいへるに小船さしわたしといふ歌は津國玉江の歌なるべし　長
州の玉江のあしとよめる重之か歌はふるく越前の玉江といふ説もあれとかしこ
の玉江古きものにみえたるを

たまみづ　喜撰式に山河たまみづとみえたり玉水は神代紀にみゆ後拾遺集に
あるし水ともよめり唐詩にも玉水の字みえたり○堰手は玉水は即玉
井也綴喜郡井手村にあり新古今集に
山城の井手の玉水手に汲てたのみしかひもなき世なりけり

たまだれ　珠簾の略なるべし後撰集に玉だれのみこしとよみ玉だれのをみめともを
よめり万葉集に玉垂小簾(ヲス)とも小簾を鉤簾(コス)と云は後人のあやまりなりともを
とよむべし又越野(ヲチノ)ともよめるは玉は緒にて貫て飾にするものなれば玉を
をの緒といひかけたる也即越智野なれはとどもよむはいよく誤なりといへ

アリ〇古今集の玉だれのこがめとハ瓶に玉の垂るがごとくあるをいふといへりとも
又小瓶をたてりしをいふ也後人こしよみし也玉だれのこがめを中にをきて
ゑてあるじハりやさかなまぎにさかなもとめにこよろぎのいそのわかめかりあげ
みやこといふ風俗の歌によりて古今の歌もあるにや〇玉垂命といふハ干満両
珠を奉行せしより號る藤大連保の神号也と師時記にみえたり筑後國高良玉垂
神社是也石清水別當隆清説上高良ハ武内也下高良玉垂也といへり

たまゆら　玉玲瓏の義也万葉集に玉響とかけり又玉ゆらにといへり又玉ゆらに眺
日の夕べ見しおもふといへるハたまさかの意也と公任の説也喜撰式にハ邂逅をたまゆ
らといふと見えし八雲御抄にはしばしの義ともみえたり万葉集ハ人の妙也よくを
かめそめ玉ゆらとたまさかといへりよく下句にけさの朝ハいかゞとのたまいへりしそ

たまがハ　廿に六の玉川といふ多くなめくらふ詞なり武藏ハ多磨郡にあり此川の
水ハ玉をふらして聯珠の如しといへり歌ハ拾遺集也陸奥野田の玉川ハ仙臺
と松島との間にあり泥川なれど水底より玉の如き泡かぎりなく沸出といふ
歌ハ能因法師也山城堀手の玉川を堀手の里玉水ともいふ所なり歌ハ俊成卿也

近江野路の玉川の歌ハ俊頼朝臣也紀伊の玉川ハ高野山にあり歌ハ弘法大師
也攝津國ハ嶋上郡也歌ハ相模也〇顕照ハ玉水を玉川とよめる事甚だ忠せり
またりよろしくハ井手の玉水とのぞむべし〇帝王系圖諸門跡譜によらば玉川
宮ハ紀伊國伊都郡にして長慶院の太上天皇の時に移御ましし所也

たまぐし　神代紀に玉籤とかけり賢木を玉串といふぞ大嘗會によりて永
久勅使記にみえし大神宮式にハ賢木の枝に木綿付たるを玉串といふ
内宮年中行事にハ枝毎に木綿を結付たる白き玉串の事なしもよあり
まつり伊勢にいふ名也大神宮式に著緑玉串あり年中行事に木綿糸褁所
帯榊懸也と見えたり〇一説に玉串ハ上つ代ハ玉を著て進る故にいへり万
葉集の竹玉なとこれなるべし後世に木綿を著るを玉串といひ絹布を著るを
幣串といひしが又轉じて紙を切て著る事になれるなり〇神宮に玉串行
事所あり宮司祢宜の玉串を取所也玉串御門といふも俗称也諸祭に宮司祢宜
の持る玉串を物忌父等取て此御門の柱下に納る也〇万葉集に玉櫛の神さびけ
んとよめるハ髪をとく物なるなり源氏に

さしかもし背代今もはらゝふさハ玉の代ぐしを神さびにけると

たまがき　神武紀に玉牆内國とみえたり玉ハほめていふ詞瑞垣に同し よて玉垣の御津とも屬られたり瑞垣と珠垣とハ異なり神祇本源に内ハ 又神宮に内乃玉垣御門といふる今の玉串御門なりといへり○聖武紀玉垣勾(ニカリ)頓宮ハ紀伊那賀郡にあり○伊勢國河曲(カワ)郡に玉垣村あり式に弥都加伎神社あるも是也神鳳抄に玉垣御厨ともいふ今此村に御厨千人衆といふありて外宮檜垣家に通達をなして麹乃御厨にて此村より麹を製し諸方へ出すを小野にて此村と岳坂村と二村ばかりなる代ありて他村に製すれハ運上を出すとも也といふ

たまのを　玉緒とかけり玉を貫の緒也○命の事をいふも霊乃緒也玉の緒に絶る ハしえ○の歌ハ新古今集に百首の歌の中に忍恋といふを流しのうとれ本あり なれハいきのびせんとてふとくらしらく恋ふしきれとながらへつる身の心ゆるびて 忍ぶことおぼつかなし今さあらぬほどにもしや命のたえよかしと祈るなり よりて切に思ふ心也なぞよるハ玄の字をかくべくハよりてよりぬ二つ代かなはく数ハ詞

ともなき朝忠集にそのいまのかぐしく大輔の君の局よりて来たるがふえよるふむ きむつくといふ詞書にて歌にあり其返しに

ふりぬとくおもひとぞそしかもはふるあやふくぞけふぞたる

又重之集にも孫のうしきり但馬守くいつしの宮にておのまさしといふりのよあと といへハ

千早ふるいつしの宮の袖のたまゆあるのうさやくしまけそそる

伊勢物語にさうしらする母ありておもひわびつくしてとくちかひしふ木代う孫 く君あらくの事ありけりやそるといふれとの事也といへり○内親王後白河院 皇女齋院准三后○鎭魂祭の緒より起れるなし　江次第薩戒記等の鎭魂 祭の儀見へ(着)へし心緒の義にかよりて同し緒に多くを貫故に玉の緒のくくり ませばく玉の緒とけてこゝろ乱れしと玉の緒長しといふ定家卿旅宿夜雨 の題にて

たび衣ぬくや玉の緒よわりにし雨そ袖にこほれて夜を占り

白樂天か詩に旅館無人暮雨魂といへり○玉緒の絶といふすれハ垂仁天皇の

皇后沙本比賣の故事に起れる成へし古事記に見えたり文選に絶浮心繫といへり○古今集に色ゆへ玉の緒ともなくらふは一ツ二ツなく貫なるんは緒を長うらん短き緒なれは轉用して玉は玉の義とせる也万葉集にさねらくは玉緒たへまくらむ

　ぬきみたる涙をもしはしとゝむへく玉の緒はかりあふよしもかな

○蔓草乃名なもいへり秋赤花成開る芳野の深山より出といふ又へせむやともいへ成は古かもいふ薮荒乃貴菜也といへり淡黄淡紅の花色二朶あり一種草なりともいへるたちまの緒ともいふ○拾遺集にかまふ野の玉江成山ともいへり江州也

たまづさ　書簡をいふ玉梓の義万葉集に見えたり又玉梓乃使ともみえ弓とありさしものによみ夫は中むの訓なれは思ひなし成みしてらん中の成たしへて和もる詞成くみて玉梓といふ義へしといへり又玉は美称の義古へは草成りて文字をかきしなるへし○筝の名にもあるは玉葉集に見えたり○玉瓜の俗名にもいへりむさしみの実の形乃似たる也

たましひ　魂魄又霊をいふ玉火の義しは助語也古語に霊火也と見えたり日本紀に識性万葉集に心神精神とも訓せり一説に玉奇日也といへり○まけしたましひ源氏に見ゆ○俗云に魂の数のなきといへるは列仙傳に出といへり

たまさか　霊異記に偶又邂逅成よめり竹取物語にたまさかるとみえしかれば魂遠るの義にや詩の朱注に邂逅不期而會也とみえ古文英奇の注に今人称邂逅曰萍水相逢とみえたり○たまさか山は攝州にありといへり瀬川の南也

たまぼこ　玉矛の義道の枕詞によめり然れとも道は天之瓊矛のあとよりなる義凝成てかくさなるところの表物なれはかくは属けよめる也なほ甚守この義なりしは大己貴命の廣矛は事実なるへき一説に矛乃身といひける枕詞也ともいへりされは倭成也を玉梓の初字としてけるは矛の反といひける也といへり○玉ほこの道のよみくたの義となる事はいかゝ物語に見えたり○玉ほこの使玉ほこの妹玉ほこの里をつけよみたる事万葉集に見えたる使は道成ひとよりは妹は道に出て待なるにや道路里程への義なるし

たまかぎら　日本紀に押木珠縵ありて古へ君も臣も飾とせるなりそて玉を貫歯

たる也万葉集にも玉縵かけぬ時なくとよめり○八雲御抄に玉髪蔓ハ老繋乃事なりと宣へり○仙覚抄に玉かづらハ冠の纓也女またゞふしへり○後撰集に玉かづらとよみ勅撰集に柳の糸とよめるハとふかづらふきさる故にあてたまかづらとよめる也○江次第に齋王著玉髪蔓依未成人不可上髪蔓歟といへり女の髪(カツラ)ともいふ也されど万葉集に鬘とつくるハ懸の義也轉しつる也又花鬘などもいへり○面影とつけるハ伊勢物語にも亦も懸の義にて満句にてくる也○葛も実あれハ玉葛ともいへり又玉ハほめていへる名也けり萬すてしれまたぐしといへるも也毛詩に葛之覃兮施于中谷維葉萋々とも白續後拾遺集にはまかづらに面かげをよめるハ通しかくしといへり永正記に正殿宝殿御垣に生かゝれ玉葛ハ掃退けさるゝ也といへり○貝に玉あるといふ玉蝶の類にて至てうるハし

たまうつ　菅家万葉集に玉桂と云て月の異名とせる歌二首あり　くりかへしみるによめるをかしきを

たまたれ　万葉集に春三月三日召侍従堅子王臣等令侍於内裏之東垣下則

賜玉箒肆宴と云しまゝ玉箒かりて鎌麻呂ともありてあれハ地膚といへるを詠し本草にも玉箒玉帚の名ありて今にいふものハ管根草の莖にてふしらへたる也又一種乃草の名にもいへりて八草州漏盧也といへり○後頼口傳に玉箒とハ著とやすなにて子日の松と引具して箒に作りて初子日に蚕かふ飼などする也といへり玉葉集に

玉箒初子のまつなどとりそへて君などなでん幾ちよふるまで

南都東大寺正倉院に子日鋤及玉箒ありて其圖など見れハ別にかゝれる体也是古へ帝ハ耕し后妃ハ蚕のまねをするかたし万葉集のすに鈍て志賀寺の上人の事など世に傳へたるハまたあやまりなるへし

たまむすび　魂結の義伊勢物語のすまぐるにも鎮魂祭よりおこる詞なるへし
神祇官乃八神殿など神皇系圖に天皇鎮魂ハ神ともいて三代實録に偸兒開神祇官西院盗取生上結御魂緒といへり

たまだすき　玉手襁也玉ハ称美の詞といへり○畝火山の枕詞とするハ畝火と宋女に通りしいへる也

その事乃起りハ允恭紀にみえしより文采女の手繦と結ばれハ天武紀にみえたり○
なく世中の玉たえなるとよめるハ中くにかけたると苦しといへる也と定家卿の説也

たまきはる　内といふに属ける枕詞也又内とハいへとも命をかけてよめる歌

日本紀に珠城張の義といへりされハりし大内ともいふ也しかれとも万葉集にあまたハ
る吾山のなふとよめり褒辭なつし儀式帳にハ玉きはる極字をものへり○万葉集
に霊尅内限とまく注に瞻浮洲人壽一百二十年と謂也しかしれハ魂極の義に攝し
たる也正義にハあらし霊異記の序に魂かぎるとろれみてしくとよめるもこれと同し
年きはるをとよめるもこれまた同義也一生涯をさせる詞にて終焉の事にハあ
らすといへりよて後世といへり玉割春とあるハ甚て顕昭法師の説に鉢杖の玉
と書きといふ義に和語とさるハいかゝあらん

たまちはふ　顕昭説にハたまハ霊也ちはふハ幸ふ也魂を賜ふ神なりといへり一
説にちはふハ幸りふの義也といへり善神の枕詞すへてちはやふるとてふるとそ

たましづめのまつり　舊事紀令集解なとにみえたり鎮魂祭とかいへり十一月中寅日

まつり令義解に召復離遊之魂魄令鎮身體之中府故曰鎮魂とみえ祝詞
に御坐所（オホミマストコロ）に令御坐給（オホマシマサ）とあるも此義也古語拾遺に鎮魂之儀者天鈿女命之
遺跡則御巫之職應任舊氏とこそ其儀式ハ江次第薩戒記等にくはし

○江次第鎮魂祭の注に宇麻志麻治命十種寶振之返死縁也とあるハ江
氏のあやまりなるべし一條禅閤兼良公の注にあるよし松下見林の説にみえし
かりされと舊事紀に本注なしと磐余彦尊元年十一月庚寅乃説ハ取用ゆべく
しかして今乃舊事紀の十宝の説を古語拾遺にも載せす續日本紀以下の史にも
引用なしといへり

△たみ　民とよめり四民の内にわけて農を称するハ田人の義田人ハ古語拾遺にみえたり
又田部の義也景行天皇の時始て田部を定めしたまふよし日本紀にみえしより倭名抄
諸國の郷名にも多くみえたり○國人をくにたみとよみまたよめるハ後嵯峨天皇
乃御諱を避しよりの事といへり

たみのかまど　民戸をいふ炊烟といへる事延喜式にみえたり○こまかなるまのゐて
よまれハの字仁徳天皇の御製なるよし古より傳へ古事談なとにも載侍れと

宗尊親王正筆の日本紀竟宴和歌集に仁徳天皇をよみまつる時平大臣の歌
に
　たかどのにのぼりてみれば天の下よもにけぶりて今ぞ富ぬる
とみえたれば是をとりて謬傳せるなるべしといへり

◯たむ　和名抄に揉をよめり以火屈申木也字亦作煣と注せりたわむることをいふ
めるなるべし◯万葉集に舟をこぎたむるといへりこぎめぐる義にて運轉等の
字をよめり又手回とかくたもとほるを同義也◯又天とむかしとつけるは
天飛の義也といへり◯新撰字鏡に滝をよめりたきむの略なるべし◯俗にたん
とあるなどいふは多の字の意也

たむろ　屯字をよみ日本紀に部字をよめり又隊字黨字をたむろとよめるも
義同じ其手くばりむらがり集る意にて日本紀に寸数群をもたむろとあまりと
よめり◯屯の國は奥州栗原郡にあり坂上田村麻呂蝦夷を征せし時屯せし
をいへりその後源頼義の清原武則に會せし所也◯田村は續日本紀に
奈良京田村の里とみえたり

たむけ　万葉集に祈の字幣の字手祭の字などをよめり手向の義也新撰万
葉集に手酧とよむみてぐらは左右の手にて捧け供るもの故にいへり又
多く旅行を祈る事をいへりされば旅向の義なるべし古今集の序にも逢
坂山に至りて手向を祈りとあれば又万葉集にもこしぢのたむけにたち
てとあるも木綿疊手向の山とよめるも相坂山を指ていひしならん都
より近江にかよふには宇治川を渡りて行ことの京とかふよる山科乃い
はたのもりまでも来て相坂をこえゆきけり万葉集の長歌によるも◯手向山を
をへら名あらはしけるは大和也奈良山のたむけを指なるべし菅家の此たびはぬ
さも取あへずと手向山とよみたまふも取敢をも手向るぬさにかけける也菅公
扈從雲林院不勝感歎聊叙所觀詩序にも供奉無物唯花色與鳥聲拜
謝有誠唯至心與稽首而已と云たまひぬ又是には誠のみにかゝるなれの
祚詠も同一揆なるべく神徳乃高を仰ぐべくぞあるべし
　よそのみに君をあひみて木綿たゝみ手向の山をあすや越なん
万葉集十二巻に腰句ゆふたゝみとあるを此ことは心得かたし　貫之

紀家集にもたむけを折て手向の山は紅葉やありけん

たんたく　拱とよめり手抱(タムダキ)の義万葉集にも見えたり身を抱く也音便にてたんだ
くともいふ日本紀に手をつかねともよめり

たむなで　日本紀に徒手徒行をよめり手空にての義なり空手とはむなしてと
よむに同し

たむさけ　神代紀に甜酒を訓せり今俗にいふ所の甘口なるべし白詩に户大嫌甜酒こと
ある古へ味のよきをたむさけといふなるへしみや姓氏録多米宿祢の下に其義みえたり大
嘗會式の多明(タメツ)酒多明(タメツ)米なとをはなるへしめつ又む倭名抄に醇をよめり
音を用ゐたるにやといふへし

たんざく　短尺とかけり尺は尺素の義也又たんざくともいへりよて短冊ともか
けり以藁薦長之付短冊を江次第に見ゆ細く紙を切て結び侍るに結付る也と
いへりされと其やうなる事多く通しくらへて枕草紙に竹の葉さんざくとかう
ゆうくんよのいくらかはりふきとりて花なる和語にたんじやく一ふりかんして宇治
頼長公の日記にも鳥羽の法皇より官女のかへたんざくを出し下さると記せり下学集

こんバ太三郎

俗言丹波国にて高の峰をいふ

ふみは短籍とかけり日本紀に短籍をひねりぶみと訓せり国史天平二年に正月御二
大極殿宴令探短籍書以仁義禮智信五字隨其字而賜物とみえたり又擬階
奏の事を記せり北山抄に四月七日奏成選短冊事とみえ定考にも一人取短冊筥を
みえ公事根源に二月の列見乃時の成選短冊とあり又短尺申文といふもあ
りともいへり義は字の如くなるへし荒短冊といふは雲圖抄にみゆ小短冊袖
昏二字也同昏にみゆ○歌の用とするは後のことなるへし拾玉集に肩に短冊
と出て手沢載せたるを其ころはゝ短冊にかきて或説に嘉暦年中に二
條家の為世卿と頓阿法師と相談して式をたてりきといへり○よみ手はなの枝
に短冊を四折して結ひ付る也といへり○短冊切といふは
五山の詩會の時乃詩をいふ南禅寺傳長老の短冊切の繪あり

たむけのかみ　倭名抄に道神をよめり唐韻に禓道上祭一云道神也といへり又朝
野群載に出京關問奉幣道神事とみえ三代實錄に越中国王手向神ともみえ
又木集に
　鳥居より相坂山のさかひなる手向の神にあぐるいさぬさ

ひさ不粘アリ

紅葉をもむすびと折りし衣をは手向の山の神やうけん

たんたく　拱とよめり手抱の義万葉集にも見えたり身を抱く也音便にてたんだ
くともいふ日本紀に手ばつかねともよめり

たむなで　日本紀に徒手徒行をよめり手空なくての義なり空手ばむなしてと
よむに同し

たむさけ　神代紀に甜酒と訓せり今俗にいふ所の甘口なり白詩に户大嫌甜酒とも
みえ古へ味のよきをたむといひしなるべし又姓氏録に多米宿祢の下に其義みえたり大
嘗會式の多明酒多明米なども此義なるべしめづらしむ倭名抄には醇とよめり
音を用ゐるにやといへり

たんざく　短尺とかけり尺は尺素の義也又たんざくともいへりまた短冊とも
かけり以藁薦長之付短冊と江次第にも見ゆ細く紙を切りて結緒に結ぶる也と
いへりされども文字の義多く通しくいふて枕草紙にも何のはさんざやくなど
はたんよのいくらばかりなるをかいて花の御陵にたんじやく一ツ出して宇治
頼長公の日記にも鳥羽の法皇より官女のかくたんざくを出下さると記せり下学集

には短籍と出せり日本紀に短籍をひねりぶみと訓せり国史天平二年に正月御
大極殿宴令探短籍書以仁義禮智信五字随其字而賜物とみえしより文擬階
奏にも見ゆり北山抄に四月七日奏成選短冊事とみえ定考にも一人取短冊筥を
みえ公事根源に二月の列見乃時の成選短冊とあり又短尺申文といふもあ
またもいへり義は字のごとくなるべし荒短冊といふは雲圖抄にも見ゆ小短冊袖
皆二字也同書にみゆ○歌の用とせられしは後の事なるべし拾玉集に肩に短冊
と出て千載集に入れる其事どもは短冊にかゝれしなるや或説に嘉暦年中に二
條家の為世と頓阿法師と相談して式を定められたり○よみ手がなの杖
にかけるは短冊を竪に内へ四折りして結ひ付るなりといへり○短冊切といふは
五山の詩會の時乃詩をいふ南禅寺傳長老の短冊切の繪あり

たむけのかみ　倭名抄に道神とよめり唐韻に禓道上祭一云道神也といへり又朝
野群載に出京関間奉幣道神事とみえ三代實録に越中国玉手向神とも見
えたり夫木集に

　鳥居より相坂山のさらひなるは何の神にもあぐらいさぬぞ

む不粘アリ

国立公文書館 National Archives of Japan

△ため　爲字をよめり去声にて与と同じ詩詞家の事なりといへり佛經に多し爲成所以也とも注せりよりて真名伊勢物語には故字をもよめり○佛足石の歌にためもろもろのといへり○亀卜にあとらふ詞にあり顕昭説にためは人なり五兆の其一也といへり師時乃歌に
ありひかる亀乃ますらに事問はためうらひとつもなそかくれなき
今を期せとして相合する事をためあふといへり

ためし　様字例字なとをよめり後撰集に花のためしなといへる花の様躰といへり○日本紀に本字をよめり俗に事のためなといふ是也古今集にも千歳のためし君にはしめんともよめり○神宝本様便奮吏往々見ゆ又本を撰する役也その後に神宝を作り奉る○物を試むるをもためしといふ詞も同義なるへし試験はためしものと見ゆへし

ためらふ　万葉集に猶豫能佃なとをよめりためらふる義なるへし源氏の抄に白氏文集の按行をもよめりといへり倭註切韻に強健をよみ埃嚢抄に踉蹌をよめり○飛騨にては俗に行を送る辞といへり

ためつもの　貞観儀式に多米都物とも献物と別に出せり大嘗會にいふ詞なり延喜式に多明酒波多明料理屋なとも見えたりされは供神の外献物といひ給賜乃料を多明都物といふなるへしといへり

△たゐ　顕昭説に魚をくむ器也といへり攩網をいふたゐる義也よてくみたましといふ
同　俊頼
かもし火のかゝりけるまにまにさしはなりしかゆくいはしもあらん

○口語にいふを賜ふの義也よて中山傳信録に衆討をたれくと訳せり○樹にいふは月桂也といへり或はたをふきりくよひ又はきともいふ玉の如き実となりて名を得たるなるへし西州にてそれはたふともとよりつゝのみともいふ線香の用とす山城にいふの木長門にいふくひの木西國にいふつゝの木伊豫にいふるか土佐におほくの木上総にもいふは伊豆に黒ねをといふ大葉小葉赤実黒実の品あり又くもたふとも
いふ豊藁擬樟に似て香氣あり花はさくへし又藪肉桂と称するものと皆同種也藥肆の松浦肉桂巻肉桂咬𠺕吧(じやがたら)肉桂もまた此物なりといへり○肉桂(?)の類に用ふるところをたとも呼ふ

たもと　袂をよめり万葉集に手本とかけり釈名に袂ハ開張以臂屈伸也といへり
○古歌に袖と袂と一首によみたるありされハ袖ハ口のかたをいひたもとハを
そのふくらみたる所をいふなりよて万葉集に衣袖ハたもとゝよめりてぬまぬく
もいへり○家詞にたもとくらふをねかひの本也と三議一統にみえたり○袂乃浦
ハ相別にあり腰越と江島との間の浜をいふ地形袂に似たり
たもつ　保ノ字有ノ字持ノ字をよめり手以の義なるへし家をたもつ城をたもつハ保身
とたもつ金をたもつハ有もれりつハ持なり
たもとほる　万葉集に俳徊をよめりたちもとほるの略なるへしやもとほひなら
ふと義通へり
△たや　俗に女乃経行中たやに入るふといふ對屋の義也后宮名目にも對屋
より出て別火かまふとみえたり伊勢より美濃尾張邊にいへり
△たゆ　竟宴和歌集催馬楽等にみえ絶ノ字をよめり不絶と万葉集にたえせ
とよめりこえるもたゆ也断ノ字も同し
たゆひ　万葉集に大夫乃手結我浦といへり日本紀にみえたる手纒也西宮抄に手

纒足纒とみえて裏書に小手とあり足纒ハ足結也といへり○田結ハゆの部にいへり
たゆむ　文選に息をよめり弛の義なるへし
たゆたふ　日本紀に寛ノ字万葉集に猶豫不定をよめり文絶塔にみゆ古今集に
ゆくのたゆたひとよめるも同したゆたふ意なるへし
△たよせ　日本紀に望拝をたよせにおかむとよめり手寄の義にや恵慶法師
乃手にたよせんみてゆくをしみ　とて
たよせにハわりなくさるをゆくつゝの波乃ちりけるハ神をしのはん
白浪の色まくさく俗にみくらくなるたよせる受よ神乃氏神
△たらん　てあり又た起ちしんハ起てはしん居たらんハ居てあらん忠見かたま
の日にまいせたらしるんとよめるハまうちてはしるん也○たらべとてあしべの義
也
たらし　人まれぬなり乃くちなるをしへハ今まそゆしとし人にあしきぬ
日本紀に足ノ字をよみし八天皇皇子なとの御名に多し日足奉りし乳
母の姓居養なりし地名をとて息長足倭足なとしやなるへし○古事紀に

帯の字をよめり歯の義なし万葉集に古への考めりて帯とせしとひふれは俗にもいた
らしなとらいつらし又ア也詩經に匪伊垂之帯則有餘となへり

たらし　光孝帝の三子を太郎二郎三郎と称す又源頼義の三子を太郎二郎三郎
と称す滋野貞主を滋二と称し在原業平を在五と称せるも同じ唐太宗ハ高
祖乃二男なるをもて二郎とし玄宗ハ睿宗の三男なるをもて三郎とするか如し
又太郎二郎三郎と字し称せる事東鑑にも見えたれと古にあらし○伊勢国たら
う村ハ太郎生といへり神鳳抄にハ伊賀に入て多良牟と書せり峯と云ハ伊賀也
名張郡比奈知村國津大明神の社地也

たらひ　倭名鈔に盥をよめり中山傳信録には湯盃を訳せりてあり又たらひハ手
洗の義也盥サウ手洗小手洗　類聚雑要にもみゆみだらひハ匜盤也法のたらひをみだら
ひの角あるをも角盤也といへり新撰六帖に

老にけるものそかなしき飲毎のたらひの水ようかふ面かけ

今ハ足をあらふ器をたらひといひ手をあらふ器をてだらひといふハ後世の詞なるへし
たらひを南部にたらハ陸奥に洗足たらひ因幡にすゝんどうといふ

たらちね○　万葉集に垂乳根とかけり母の枕詞にいへり母をたらちめとよめるハあり
万葉集にも見えたり○たらちをハたらちめハ後世父母をたらちねといへる也神代紀に
父母乃名に足摩乳手摩乳あり乳養撫育乃義也

△たらり　古事記にたらりけしを而往邪理と見え万葉集に往きたるを借り有
と書きしも起有と書きてあり又たた也伊勢物語源氏にをりたらひたらとと
いふもおなじてありかれの義也○瑟兮僩兮を音をかりてたらりかんよりと
よむのあれハとあり又たた也○人に瑕あらふをたらりといふもたらりひと
みとらふ詞より出たる義なりけれハ歯の字なるへし○馬の病なるを倭名鈔
に驇字をよめり歯の義にや新撰字鏡に疣をよめり史記に馬驇不行
とみえたり○幾人をいくたり二人をふたり三人をみたりといふもの足の義
也し鳥といつる万葉集に見えたり○搢紳家装束乃時太刀を佩るに
に前にたりといふ物あり古へ馬に乗るに口にくゝ久太刀乃柄を引たくめり
し事也といふ歯の義なるへし

△たる　足をよめりといふれるまて用けり○歯も足も義通へり○樽を酒を

缶の義なるへし揺と同しよりて後俗揺字をも用ふるにや揺は缶に同し酒器なり
あるは二合のものいるゝ也倭名鈔には无和名俗称去声といへり朝鮮語にも
泰留といへり○為字をよむはとあるの義と通ふ又た也今の語末にいふを約言なり
しかそふるかけふるにて皆同しくたれて通ふ又た也
たるひ　垂氷也俗につらゝといふも是也今も仙臺にはたるひといふあり○古事記力競の手
に立氷といへるも是なるへし○垂樋の氷といふ義を訛るなり
△たれ　誰をよめり俗にだれといふ転なりてらひ文轉訛しくだれともいへり孰をも嚀
と同し○語にとははたれと約めるなり○たれその杜は伊賀國伊賀郡にあり
哀其社と同しく市部村にあり風土記に垂國社大物主神也といへる藤原忠家
らんの岐ちらにも三輪の神さびて跡はふれその杜の下かげ
たそがれ　源氏にみえたる誰時の義也俗にたそと昏をいへり文暁にもいふや小町
今よ
暁乃たれ時星を山の端にまだ出るくれかつなせる哉
世に暁の明星といへるなるへし

△たわ
△たを　古事記に山多和とみえしは山のたわみたる所をいふ也今も西國には多
くいへり美濃の山中にては絶頂の平かなるにもいへり信濃に和見嶺あり是
もたわみの略也大和にも多武の峯をいへり山たわむと水ふむとよ
めり○姓に大多和あり大多和三郎義久は三浦義明の子也○太和より伊賀伊
賀郡治田に通る徑を大多和越といへり
たわむ　撓字をよめり新撰字鏡に剖をよめり手輪ぐるの義也孟子の膚不
撓をたわまんとよむは誤也○万葉集によめりたわむともよしたわわともよ
めり
たわら　俵をよめり田藁の義なるや今俵子ともいへり俵の字は宋史に定俵馬歳額
といへる文献通考治平全書にも見えたり明律に俵與とあるは割つけたる類
書纂要賞賜部に分俵俵散也といへり六書故にも分界也といへり今も米囊を賞
賜するに俵でちまきとふくつ也延喜式に公私運米五斗為俵といへる是甚多く
今諸州に五斗俵四斗俵三斗三升俵あり不同あり○藤原秀郷を俵藤太といふ

国立公文書館 National Archives of Japan

八不經の俗説也本居大和の田原也といへり延喜十八年十月二十一日斬白蛇龍
神與十種珎宝と蒲生系圖に見えたり三上山の蜈蚣を斬と世にいふは非なり
されど秀吉公すて君と生れし時蒲生氏々誕生の賀に秀々の矢乃根を献と三歳
なりし早世せり其矢の根妙心寺に収むといふ

△たゐ　万葉集に田井と見え山の下田の田井をいふよて唯田の義にみゆるといへ
倭名抄に名をも田井と見えたり或ハ田居とも書りよて田なる也ともいへり軍防令に
防人よも田よつくと蓮舎いふに同し田居とハ稲を刈乾て暫くおく所をいふま
に田屋をみて居也⊙姓にもあり⊙田中乃井戸をいへるを同義なるにや
哥によけるを苗代水にかけ見えて田中の井戸乃やまふんのな

たゐや　⊙對屋といふ伊勢物語に西の對なと見えたり主殿に対する屋也對の
屋造にハ角木を入ど妻戸なりしとそ⊙忌日の前夜をいふを逮夜といふ

たゐぢ　對治の字梵云に多く見えたり又退治ともや

たゐやう　對揚字書經に見えたり山槐記に城南寺ノ競馬對揚誰人哉とある
城南寺ハ山城紀伊郡竹田村の安樂壽院也又中島村城南神の社也社の東北に

真幡寸辺あれハ式に所謂真幡寸神社二座是也令集解真幡寸神社加茂別雷
神之轟神也と見ゆ

△たゑ

△たねがひ　弓懸よいふを手覆の義也鞆覆の左右乃端の盗なる所をいふを
盗覆乃義也といへり

たねぶひしく　光仁紀の詔に見えし多意多比之美能毋志美と訓す多字ハ能
字の上にある可きを誤て意字の上に置し也されと穏しみ頼しみの義也

倭訓栞前編十四終

国立公文書館
National Archives of Japan